

泉鏡花没後八十記念

東方幻想文学合同

9-1

「追慕」

近藤貴弥 編



出藍文庫

目次

こうず	鍋の底	五
ガルゾ	ヴァーチャル・メトロポリス	二五
ひととせ	星見広場の桜岩	五五
椰伯太郎	ゆきあはせ	六九
藍もどぎ	十六夜月報	八三
深紅香奈	信貴尼公	九五
近藤貴弥	母	一二五
後書き(近藤貴弥)		一四六

こうず
鍋の底

《本籍地〇〇県〇〇市〇〇丁目〇〇番地、身元不明。B市県道〇号線沿いの山林にて発見。発見時、大鍋のような容器の中に身体を折り畳んでいる状態で、長時間の煮沸によるものか全身に著しい損傷あり。遺体は火葬に付し——…：（後略）》

死んだ人間に自分自身を当てはめてみるという、褒められたものではない趣味がAにはあった。

例えばこれは一例だが、彼は暇さえあれば街の販売所に向いて官報を買い求め、行旅死亡人に関する記事を読みふける。そして、なるべく普通ではない死に方をした者に対して特に注目し、そこに書かれている人物がもし自分だったらと考える。そんな奇癖がもう何年も続いていた。

彼はよく、死人に自分を投影して書き物を行ってもいたが、その日そこには八雲紫の存在も認められた。よく知られた通り、この女はある種の創作において最も頻繁に引用される人物の一人であり、物語の導入をスムーズにする役目を担っている。

7 鍋の底

さて、紫は

「あなた、なぜ死のうなどと考えておられたのです？」

と、Aに訊ねた。

すかさずAの筆は、紫に救われたと自身の来歴を規定する。彼女は自殺か否かという瀬戸際に追い詰められていたAを説得し、B市の喫茶店に連れ立って入った。まだ昼前だからか客足はまばらで、せいぜい男子大学生がサンドイッチを頬張りながらテキストを開いているくらいだ。熱いコーヒーを飲みながら、Aは紫に自殺未遂までの経緯を話すのだ。

Aは、平凡なサラリーマンなのだろう。

この世に生を享けて数十年、今まで誰をも害さない善良な生き方を心がけてきた。決して優秀でも非凡でもないが、これといって重大な欠点があるわけでもない。ごく普通の学生生活を経て、不景気の中でそれなりに苦労して就職活動に成功し、愛した女性と結婚して娘も産まれた。AはAなりに精いっぱい生きてきたはずだ。しかし、どこで何を間違えたのか、仕事では完全に出世コースから外れ、オフィスの端に縮こまって時間を潰す毎日。妻や娘と

の仲は冷え切り、一緒の時間を過ごすどころか、顔を合わせても喧嘩すらしなくなった。仕事でも家庭でも、彼の存在はそれが義務であるかのように軽んじられ、嘲笑すら与えられず、まるで居ない者、忘れられた者のように扱われていると想定した。

だから彼は死のうと思った。以前から何となく「死んでみようか」という思いはあったが、自分で自分に言い聞かせる冗談だと考え、努めて目を逸らしながら過ごしてきた。だということに、今日に限って唐突に自殺の決意がついたのは、自分が居なくなるところで誰もさして気にしないと考えたせいだろうか？　しかし、そんな境遇を良しとしないプライドと正義感——という名の狂気が彼には燻っていた。Aは、最期に何か世のため人のためになる大仕事を成し遂げてから死にたいと思い、飢えた浮浪者たちのために大鍋で煮られてスープになるといふ決意を固めた。他人に食べられるには、それなりに威儀を正す必要があるかと考え、彼はスーツを身に着けていそいそと大鍋に入り自身の身体を折り畳んだ。……官報の行旅死亡人の欄に載っていた、年齢は四十代、スーツを着たサラリーマン風の、痩せ形の男性。これが、今のAの姿と素性であり、死ぬ寸前で八雲紫にそんな企みを止められた孤独な男の

様相である。

「あの、ところで八雲さんは……自殺予防のカウンセラーか何かですか？」

コーヒーを飲み終わると同時に、Aの筆は自身の口に質問を促す。すると紫は、そんな本心を見透かしたかのように「いいえ」と笑みを深めて否定する。

「でも、似たようなものかもしれませんわ。私、あなたみたいに世の中に絶望した人の相談によく乗っているんですの」

「はあ」

少なくともAは、紫を変人の類として解釈していたかもしれない。でなければ、こんな悪趣味な行為はしないはずだからだ。自分の悪趣味さをひとまず棚に上げたAの筆はさらに早くなり、紫はなおも話を続ける。

「それで、たくさんの方々とお話して思ったのです。人生には死ぬとか逃げ出すとか以外の選択肢、言うなれば救済と安堵の道が必要だと。実は、Aさんに声をかけたのもそうした次第で」

彼女の言葉尻を捉えるなら、すわ怪しい宗教の勧誘かと身構えて然るべきであろう。もちろんAも自分をそうさせたが、すると紫は「そんなに心配しないで」と苦笑いした。

「別の場所で、別の人間として、人生をやり直す。……そう申し上げたら、あなたもご興味が湧くのでは？」

「それは……戸籍を買って別人になりすますとか、そういう話ですか？ アウトローもののフィクションによくあるような」

「いいえ。あなたには役者になって頂きたいのです。身分を書き換える事も、ましてや整形手術などする事もなく。巧妙な演技で他人の人生を演じる、一人の役者に」

本題はここからである。Aはいよいよ気を引き締めて執筆を進めた。紫の言葉はまるで魔術かの如く、自殺未遂の人間にも生き直したいという願いを植えつける。

「幻想郷、という土地がございます。そこに住む久作という男が、突然蒸発して行方知れずになりました。Aさんには、その久作を演じて頂きたい。久作の家に住み、久作の仕事をし、久作の家族と過ごして欲しい。つまり、生前の久作とそっくり同じに振る舞って欲しいので

す。そうすれば、あなたは新たな居場所を得られます」

物語の不可解さが増すほどAの筆致は冴え渡る。赤の他人の生活を、本人の代わりに演じて人生をやり直すなど――それではその久作とやらの周囲の人々は混乱するのではないか。死者を侮辱しているとして怒り悲しみ、追い出されるのではないか。当然の指摘を鮮やかな台詞回しで書きつけると、すかさず紫はこんな風に言っただけだ。

「世界というのは一場の演劇であり物語。人間とは自他を問わず知らぬ間に役を与えられた役者たち。ある人が本当にその人かどうかとは、主観によっては決められないもの。その人らしく生き、振る舞えば、本人の思いに関係なく周りはその人だと感じる。そうは考えられませんか？ ある存在は、他人から承認されて初めて実在する権利を得るのです。極端な話をすれば、顔が変わっても周りがその人だと思えば、その人は今なお実在する」

紫の主張は紛れもない屁理屈だが、語り口には妙な説得力があった。一切の推論を交えない、事実だけを断言している。途絶える気配のない穏やかな笑みは、彼女のそんなメッセージを表現しているのかもしれない。

「言い方を変えてもう一度説明するなら、用意された役柄がしっかりと演じられる事にのみ世界は価値を見出すもので、誰がその役をやっているのかは案外気にしないのかもしれないかもしれません。さあ、Aさんはどうなさいます？」

ここでAの執筆はしばし停滞する。行旅死亡人であるAならば、何と返事をするだろうか。その果ての想定が今一つ思い浮かばない。頭を振って席を立つと、Aはしばしベッドに横たわった。眠るつもりは無かったのだが、彼の意識は急速にまどろみの底へ落ちていく。

久作とその一家は、幻想郷の人里で商売をしているのだという。成り代わりは呆気ないほど上手くいった。紫から渡された服を身に着けて、さも外出から帰ってきた風に店先をくぐると、従業員たちも家族も、この家の当主を見間違えるはずがないという様子でAを出迎えてくれたのである。従業員は深々と頭を下げ、妻は進んで上着を預かった。二人の幼い子らは、楽しみに笑いながらちよろちよろと『父』の足元にまとわりついた。誰一人として、

よそ者への氣遣いをしているとか嘘をついているとかいった風ではなかった。心の底からAを久作だと信じきり、久作に普段している態度をそのまま見せているだけなのだろう。

「おお、すまん。遅くなったな。今帰ったぞ！」

元の家族にも職場にも、長らく示していなかった朗らかな顔をAは見せた。その日から、彼の新しい生活は始まったのである。妻はもう若いとはいえないが、笑った顔が子犬のように可愛らしい女だった。家庭生活の隅々まで彼女の気のつかない所はない。帳簿のしまつてある場所や商品の仕入れ値から、風呂を沸かす際のちょうど良い温度、煮物の味つけまで、およそ『久作』という人間についてAに解らない点が出るより早く、全て彼女が先回りをして準備してくれた。別人に成り代わるといふ難しい仕事をAがやり遂げられたのは、ひとえに彼女のおかげだろう。二人の子供は、五歳の兄と四歳の妹がいる。どうやら夫婦が年経てから産まれた子であり、前の久作もそれは大事にしていたらしい。兄妹ともに、早く大きくなって父様の仕事を手伝いたいといじらしい事を言ってくれ、学問に熱心に打ち込んでいく。妻も子らも、A本来の家族とは大違いだ。彼が求めていた、彼の理想とする幸福の形が

そこにはあった。

そんなA——久作の仕事は、ある種の卸問屋のようなものであった。

幻想郷にそびえる妖怪の山という場所は、人間と妖怪との協定によって前者の入山が限られている。しかし、山地で採れる品は時に人里でも必要になる。だから、特別に許しを得た一部の商人だけが買いつけを許される。久作は、その数少ない商人のうちの一人なのだ。

妖怪との商談などもちろん経験は無かったが、これが思いのほか上手くいったのは彼自身にも驚きだった。元々、商売の窓口がそこまで多くないから条件としては大甘だったし、何より妖怪たちの経済もまた人間の側と結びつかなければ立ち行かない。件の山には守矢神社というのがあるが、麓からこの神社には参拝客のためにロープウェイが通っている。これの建設が始まった頃、参拝客の先導役を努める白狼天狗たちの仕事を奪うのかと一騒動が持ち上がったというのだから、本当に人間社会も顔負けなのだ。それくらい、幻想郷では人間と妖怪が強く関わりあっている。

山の妖怪たちとの商談を終えた晩秋のある日、久作は数名の供回りと麓に降りる道を取っ

た。人里に帰りつくまでには件のロープウェイの近くを通らなければならないが、その設備の近くに、彼は何かがうずくまっているのを見かけた。ちょうど日陰になっているのはつきりとは判別できないが、大きさからいって人間の男かもしれない。怪我をして動けないでいるのだろうか。にわかには義侠心が燃え上がる。久作という男は里の名士として慈善事業に熱心だったからだ。上白沢慧音女史の寺子屋にも少なくない額の援助をしているし、毎年の大晦日には貧しい人たちのために炊き出しを行っていたという。もちろん今の久作もそれを引き継ぐつもりでいる。

「お前たち、急いで里に戻って人を呼んできなさい。あそこに誰か倒れている」
供の者たちはうなずき、主人に命じられた通り大急ぎで山を下りていく。

皆が戻ってくるまでには少し時間があるだろう。久作は倒れたまま動かない相手の近くに駆け寄った。彼の具合を確認してやろうと考えての事だ。

「おおい、お前さん。大丈夫かい。怪我などはないか？」

すっかり板についた久作としての言葉遣いで、行き倒れの男に語りかける。男は小さな呻

き声を発し、身体をかすかにのけ反らせた。彼はスーツを着ていた。幻想郷ではまずお目にかかる事のない、あの外界の衣服だ。ビジネスマンか、役人か、それとも政治家か……いずにせよ、この幻想郷に迷い込み、行き倒れてしまった者を放っておく訳にもいくまい。

そう考えているうちに、男が意識を取り戻す。

目覚めたばかりで状況の呑み込めない男に、久作は懇々と説いてやった。ここは幻想郷という土地である事、自分は麓で卸問屋をやっている者である事、山の中に居てはいずれ妖怪に襲われてしまう事。久作の話聞いた男はすっかり震え上がり「では、私はどうすれば良いでしょう。帰り方も判らないし、こんな場所では頼れる人も無い」と訊ねる。

ここで久作は、少し頭をひねった。

八雲紫は、その人らしく振る舞えば周りはその人だと感じると言った。ならば、それは自分たち二人の間にも通じる現象なのではないか？ 『久作』という自分の名を目の前の男に貸し与え、一晚の宿を与えてやる。そして明日になったらまた返してもらおうのだ。とっておきの名案を打ち明けると、男は一も二もなくうなずいた。

しかし結論から言えば、久作の計画は失敗した。彼は自分の名前を返してもらえなかった。里の貧民たちに混じって雑魚寝をし、翌朝になってから自身の店に戻ると、誰も自分が久作だと気づかない。そればかりか、そこに一人が立っているとも思わないようなのだ。

時々、客がぶつかってよろけるが、地面につまづいたのだと考えて怒りもせず去っていく。一体どうしたのだろうか。焦って、彼は妻と子供たちの名を呼んだ。さすがに夫の、父の、声を知る家族はすぐさま顔を見せるが、店の玄関先に立ち尽くす久作の方を見てはくれなかつた。彼女らが親しく応じるのは、全くの別人である。久作が『久作』という名前を貸し与えた、あの外界の男だ。

「おお、お前たち。何か用かい」

「え？ あなたがお呼びになったのでは？」

「いいや。まあ、聞き間違えというものだろうさ。……」

目の前で妻に応じる偽の久作は、本物の久作を見もしなかった。否、気づいてすらいないのか。

たまらず店を飛び出した彼は、その日一日をあてどなくさまよった。空腹を覚えて適當な畑から作物を盗み、農夫から追いかけられた気がするが、やっぱり気のせいだったかもしれない。やがて彼は道端でぼうつと座っている乞食の衣服を剥ぎ取り、頭からすっぽりと身を覆う。垢と吐瀉物の悪臭を宿した衣服が、自分という存在を繋ぎ止める唯一の枷となったかのような。乞食は裸にされたのを恥じたのか、いつの間にか姿が見えなくなっていた。

そうこうしているうちに、夜になった。

気づくと彼の足取りはすっかり人里から遠ざかっている。辺りを見れば、ちょうど里と森の境といった所か。前に誰かから注意されたのを思い出す。そこいらまで来ると、妖怪が人間を襲ってはいけないという協定は適用されない。意識すると、神経の奥底から怖気が走る。宵闇の向こうに浮かび上がった少女の影が、とても人の物とは思えない牙を剥き出してこちらに迫っていた。悲鳴を上げて逃げ出す拍子に、被っていた乞食の服が脱げ去った。影はもう追っては来ない。脚に残った最後の力を振り絞ってめっちゃくちゃに走り回る。

彼はベッドから飛び起き、すぐさままた机に向かう。

慌てて筆を執り、頭を抱えながらさっき見た夢と対決する。彼は夢の中でいつの間にか別の人間を演じるのを承諾し、さらに借りた名を別の誰かに又貸しまでしてしまった。何と愚かな失敗だろう。お人好しにも程がある。

だから夢の続きを書き記す彼は、次に少し悪者になる決意をした。

夜がとっぷり深まる頃、妖怪の山に立っていると設定する。どうやらここは天狗の国であるらしい。見事な朱塗りの橋の真ん中に立ち、行き交う種々の天狗たちを睨んでいたが、誰もこちらに気づきもしない。しかし奇妙な事には、見もしないのに見ている如く、器用に彼の居場所だけを避けて歩いていく。

がりり、と、彼は歯噛みをするだろう。名前もなくなった今では、自分が誰かを証明するための物を何かしら被っていないなければならない。さっきみたいないな乞食の衣服でも構わないのだが。そう思ってあちこちをふらつくと、ある小料理屋の店先に女物の外套が掛かっている

のを都合よく見つけ出した。客の様子を見るに——よく人里にも飛んでくる鴉天狗の新聞記者、射命丸文のものらしい。悪いとは思いつながらも彼はそいつを拝借し、大急ぎで身に着ける。不思議な事に、丈も寸法も男であるはずの彼にぴったりである。女物が着られるくらい小柄な体格ではなかったのだが。

不思議がりながら通りを歩いていると、別の鴉天狗と出くわした。

「文じゃん。何してんの。早くしないと始まっちゃうよ」

その鴉天狗はこちらが答える間もなく、半ば引っ張るようにして文を装った彼を街中の広場へと連れていった。ほとんど瑕疵のない流れだ。後はこの鴉天狗との関わりを描いて、物語の行く先を修正すれば良いだろう。

数分とせず着いた広場には多くの天狗たちが集まり、何かの催しをやっているようだ。人波をかきわけて目を凝らすと、何と、そこでは一人の少女が袋叩きにされている。棒で殴ら

れ、石を投げられ、罵倒と嘲笑が浴びせかけられている。彼は少女に見覚えがあった。里へたまにやって来る魔法使い、霧雨魔理沙だ。親しくはないが知らぬ仲でもない相手が手酷い暴行を受けているのを見て、さすがに立ち竦むが——よく見ると、魔理沙の様子は普通と違っている。

「…………や、やめてくれ、なんだぜ！　お、俺は何も悪い事はしてねえんだよ！　……だぜ！」

俺？　果たして魔理沙という少女は自分を俺と呼んでいただろうか。訝しんでいると、魔理沙、ではないかもしれない少女の衣服に酷吏たちの手が伸びる。あつという間に彼女は裸にされた……はずだったが、その裸体が彼の眼に映る事はなかった。夜の闇に光が滲んで見えるように、やがて喧騒の中に融け込むようにして少女の姿が見えなくなってしまったからだ。死んだとか逃げ出したとかではない。ただ、その場から見えなくなった。

はッ、と彼は目を醒ます。

あれこれ思案しながら書いているうちに疲れが溜まったのか、机に突っ伏してまた眠ってしまった。途中まで書かれた原稿と、さっきまでの居眠りで見た夢。この二者の対決は未だ続いているらしい。彼はもう一度、自分の書いているはずの物語に向き合った。

「どしたの、文。さっきから黙りこくってるけど」

少女から顔を覗きこまれた。しかし彼女と射命丸文との関わりを彼は知らない。だから、あの魔理沙だった誰かのように何かを間違えないという保証はない。

それは走った。最初に立っていた橋へ行こうと思った。名前を貸してくれる者は居ないか。何もかもを間違えずに済む名前を。暗闇に梢のざわめき。標識が車のヘッドライトに照らされた。ここはB市の山林の奥だ。思ったより遠くまで逃げてしまった。引き返すだけの余裕はない。

どうすれば良いだろう。思案して、はたと思いつく。妖怪に食べられれば良いのだ。そういえば小料理屋があったと思ひ出す。そこで調理されるのである。ただの肉になってしまえ

ば何をも間違わず、何に貸し与える物もない。皿の上の料理は夢を見ないし物語を書く事もない。ただ、料理は料理として存在するだけ。

身に着けていた外套が宙に浮かび、一瞬で橋の上に落ちる。始めから誰も居なかったのうに、空虚な闇へ冷たい風が吹く。その時、ひどく慌てて誰かがやって来た。その誰かが外套を拾いあげて、大急ぎで袖を通す。すると、その誰かは次の瞬間にはもう『射命丸文』になっていた。彼女は近くにあった小料理屋に入り、料理を一つ注文する。そしてそれは、大鍋の底で客と店員のやり取りを聞いていたのかもしれない。やがて良い匂いの煙が立ち昇り、大鍋の中に折り畳んだ身体がぐずぐずと心地よく煮崩れていく。

《本籍地〇〇県〇〇市〇〇丁目〇〇番地、身元不明。B市県道〇号線沿いの山林にて発見。発見時、大鍋のような容器の中に身体を折り畳んでいる状態で、長時間の煮沸によるものか全身に著しい損傷あり。遺体は火葬に付し——…（後略）》

死んだ人間に自分自身を当てはめてみるという、褒められたものではない趣味が A にはあった。

例えばこれは一例だが、彼は暇さえあれば街の販売所に向いて官報を買い求め、行旅死
亡人に関する記事を読みふける。そして、なるべく普通ではない死に方をした者に対して特
に注目し、そこに書かれている人物がもし自分だったらと考える。そんな奇癖がもう何年も
続いていた。……。

ガル
ゾ

ヴァ
ー
チャ
ル
・
メ
ト
ロ
ポ
リ
ス

東京はもはやメトロポリスといった語で表される場所ではないのだろうか。マエリベリー・ハーンは『ヒロシゲ』に乗っておおよそ三十分ほど経ったところでそう考えた。先ほど目が覚めたばかりだ。

カレイドスクリーンに映し出される太平洋。そして大海原の中に聳立する富士山。いわゆるヴァーチャル・リアリティの産物だが、かつての「仮想現実」という訳語は今の時代にはふさわしくない。「事実上の現実」という訳語がしっくりくる。

サイエンス・フィクション作家のワインボウムが一九三五年にヴァーチャル・リアリティのコンセプトを著してからもう随分と経つ。大戦後、アメリカ合衆国を中心として様々な試行錯誤を経ることになる。日本でも二十世紀後半には大手ゲームメーカーが家庭用ゲーム機としてヴァーチャル・リアリティ装置らしきものを開発したが、今となってはもはや液晶テレビジョン受像機と同じような骨董品だ。ゼロ年代を経て二〇一〇年代にやっとヴァーチャル・リアリティの普及が現実味を帯びて来た。そしていくらかの時を経て、ヴァーチャルとリアルは区別することはできなくなるに至った。もう不恰好なサングラス状の装置を身につ

ける必要もない。シミュレートッド・リアリティの実現までもう少し、というところだ。

カレイドスクリーンに再び目をやる。

大学の講義で視聴した一九九九年公開のハリウッド映画を思い出す。まだサイエンス・フィクションという言葉が一般的であった時代の産物である。作中ではヴァーチャルとリアルは区分可能なものであり、主人公のリアルへの目覚めがあつた。しかし映画は未来を予見してはいても、その予見は公開当時のヴァーチャル≠リアルという常識を打ち破るものではなかつた。

かつて物語は「仮想現実」であつた。だからこそ、サイエンス・フィクションはフィクション足り得たし、夢は生理現象としての意味と共に、未来への憧憬の意味をも含んでいたのだろうか。

蓮子の言葉を思い出す。

今、物語は「事実上の現実」である。

「物語」という言葉が、ストーリーではなくナラティブを意味していた時代に私たちは戻っ

てしまったのであろうか？

始まりは、車椅子の偉大な物理学者による観測物理学の終焉の宣言だ。彼は言った。客観など存在しない。すべてのものは観測される以上、主観のフィルターにより濾過されざるを得ない、意識は現実化するのだ、いや、現実と意識は等価なのだ、と。当時の常識からすれば突飛ともいえるその主張は科学者仲間の笑いを誘った。多くの科学者が彼を敬愛していたにも関わらずである。

そうこうしているうちに、といっても随分と前だが、人間の脳が見せる様々なヴィジョンが電気信号のやりとりで再現されるようになった。今や電気信号で作られたヴァーチャルの感覚は「リアル」よりも五感を刺激する。電腦麻薬なんでもものも当然のように出てきた。

古典物理学は量子力学の近似であった。量子力学は超統一物理学の近似であった。そして超統一物理学が相対性精神学と融合しつつある。

私は思い出す。学会発表の準備のため、空間に投影されたスチール写真を見続けたときのことを。

一万八千メートル以上から撮影された、一九八〇年代後半のアメリカ諸都市の高高度写真。街路がブロック状に並びんでいるその様子は、当時使われていた、半導体集積回路のはめ込まれたコンピュータの内部を思わせる。ささやかな高揚感が湧き上がる。

火星探査機ヴァイキングと惑星探査機ボイジャーが撮影した数々の惑星の写真、および人工衛星ランドサットとスペースシャトルが撮影した地球の写真。ざらついた黄色味を帯びた火星、乳白色をした月面、切り裂くような暗褐色を帯びた木星や土星の衛星たち。自分が立っているこの惑星を外部から見て、はるか彼方にある星々を見る。高揚感は最高潮に達する。コンピュータ・グラフィックスにより再現された、三百七十六億光年遠方にある惑星団のイメージ映像。どのような色をしているかなど正確には分からないはずだが、なぜか先ほどの太陽系の星々の色とよく似ている。疑問符が浮かぶと共に、先ほどの高揚感は急速にしぼんでいく。

二〇二〇年代後半の東京の景色を映し出した写真。人工的な灰色の中に、赤っぽい色や黄色っぽい色がところどころ点在する。その色は信号機のような鮮やかな色ではない。むしろ、

先ほどの写真の火星のようなざらついた色だ。

最後に現れたのは月面である。かつてはウサギが住んでいるとかアポロは月に行っていないとか言われたものだ。実際の荒涼とした地と打ち捨てられた月面探査車、それを見るツアー客。大地に刺さった星条旗はやはりざらついた色だ。

火星の本来の色は黄色というよりも赤みを帯びた茶色に近い。通時的な人類の無意識下の色彩感覚がヴァイキングやボイジャーが撮影した写真の色彩合成に影響した。意識の中に浮かんだ映像や色素は、脳神経から眼球を通して現実に投影される。そしてその逆も然り。脳裏にそんな考えが挟み込まれる。

私は私自身の意識の映像を見たに過ぎないのではないだろうか？ その瞬間、虚しさに似た感情が私を襲った。今や夢ですら外部に投影できる時代である。結局のところ、私は私の中を堂々巡りしていたにすぎなかった。自分の排泄物を注視したような落胆。いや、私自身などという、何か特別なものなどではない。皆だ。皆の意識だ。新しいことなど何もない。そしてそれは私でなくてもこの時代に生きる人たちにとっては同じなのだろう。特別なこと

など何もない。私も見ては見られる人類の一人にすぎない。どこまでも主観的で、なおかつどこまでも相対的な……。そして投影機のスイッチを落とした。

乗車して四十八分が経過した。茎と赤い花卉だけの奇妙な花に覆い尽くされた東京の景色を想像する。人工色を失った大都市は、その活力と反比例するかのように自然色に着色されていったらしい。私の生まれるずっと前の話だ。もはや林立する摩天楼や毒々しいネオンサインを空想することなど叶わない。私にできるのは写真という視覚情報を咀嚼することではない。教科書に書かれている、歴史という文字媒体をスキヤニングすることだけなのだ。

ゴールデンウィーク。三度目の東京だ。寂しくないといえば嘘になる。しかし、私一人で、かつての大都市を散策するのも一興だろう。

『ヒロシゲ』が卯東京駅に到着する。五三分の旅は今までと同じくあっけなく終わった。前々回は充実していたのだけれども。いや、もうよそう。一度目の旅のことをもう思い出したくない。二度目を思い出すから。あまりに楽しかったからこそ、そう感じる。

地上に上がり、駅から外に出る。いたるところにあの奇妙な花が咲いているのが目に入る。

花は匂いを発しないから造花のようにも感じる。あらゆる有機物、無機物を貪り膨張し続けた都市。人工物は無味無臭の代名詞であるが、実際のところ、本当に味も匂いもないというものを私は知らない。あるとすれば、この東京という都市、それも想像された「東京」だろう。もし平面であるのなら、それこそ先ほどの富士山と何も変わらないのではないか。もっとも、私にとっては暴力的な味付けや塗装がなされるよりも無味無臭のまままでいてくれた方がずっと良かったのだが。

かつて驚きに満ちていたであろうこの都市。しかし今、そんな旧時代の遺物を有している地がどこにあるというのだろうか。世界遺産でさえもはやカレイドスクリーンに映し出されたまがいものに代替されている。みんなまがいものなのだ。みんなみんなそうだ。

「あの、ちょっと道をお尋ねしたいんだけど……」

後ろを振り向く。日傘をさした女性。白っぽい洋服を着こなしている。年齢は私よりも五歳ほど上だろうか。

「ごめんなさいね、地方から出て来たから最近の東京は詳しくないの」

訛りの全くない、流暢な日本語。しかし金髪だ。それも染めたものではないように思える。「ええっと、私もあまり詳しくなくて」

思わずそう答えた。本当にこの人は地方から出てきたのだろうか？

「困ったわね……そう答える人、あなたで十一人目」

そうは言うものの、その口調には困った様子はあまり見受けられなかった。この人は断られるのを楽しんでいるのではないかとまで思った。

「ねえ、ちょっとだけ付き合ってもらえないかしら。タダとはいわない、お礼はするわ」

「いえ、いいですよ、お礼なんて」

「じゃあお言葉に甘えて」

そう言って彼女ははずかしく私に近づいてきた。別に、はいと言ったつもりはなかったのだが。だけれども、私にとっては今日という日、東京という地の両方が、本当は忘れ去りたものだ。どこまでも乱暴に上書きがしたかった。裏切りなのだろう。でも、私にとっては後ろ指を指されるのを甘受する方がずっと幸福だった。

「……それでどこまで行きたいんでしょ。さっきも言いましたけど、私も東京は詳しくないです。一回ほど来ているだけですから」

「十分よ。経験というものは対数関数的な伸びを示すんだから。別に奥多摩まで行きたいとか言うつもりはないわ」

「でもあんまり遠くまで案内することはできませんよ」

「そこまで遠くじゃないわ。江東区に行きたいの」

「江東区？」

「ええ、寄りたいところがあるの。どう、ついてきてくださらないかしら？ もちろん電車代と食事代は私が出すわ」

「そうですか。……わかりました」

「ありがとうございます。助かりますわ」

「寄りたいところはどこなんですか？」

「有明三丁目の東京国際展示場。いわゆる東京ビッグサイト。今日、イベントがあるの」

「はあ」

何のイベントかは聞かないことにした。聞いてもはぐらかされるだけだろう。

「とりあえずビッグサイトまで一緒に来ていただいてもよろしいかしら？」

「いいですよ。……今日は一日フリーですから、もし良ろしければイベントに同行してもいいですか？」

「あら、いいの？ 私は全然構わないけど……」

「構いません。どうかお気になさらず」

「まあ、嫌だったらいつでも帰って大丈夫ですから。そうだ、お名前をお聞きするのを忘れていましたわね。私の名前は小泉っていいますわ。あなたは？」

「えっと、マエリベリー・ハーンです。周りからは長いからメリーって呼ばれているんですけど……」

「へえ、外国の方？ 日本語、お上手ね」

「ええ、一応日本には長く住んでいるので……」

「いいわ。マエリベリーさん。今日はよろしくお願いしますわ」

「ええ、こちらこそ。迷ったらごめんなさい」

私たちは品川線に乗り、大崎へと向かうことにした。そこからりんかい線に乗り換え、国際展示場駅へと向かう。

電車に乗り込む。立っていた方が良かったが、小泉さんが座席に座ったので仕方なく隣に座った。

「毎年東京には来ているんだけど、品川線なんてものができたのね」

「ええ。一度友人と東京に来たことがあるんですけど、友人の実家は品川線から接続する別の路線沿いにある。東京も再開発が進んでいると聞いています。路線は結構変わったとか」

「京都は結構変わったと聞いているけどね」

「京都の大学に通っていますが、確かに昔よりだいぶ変わったみたいですね。昔は建築物の規定もうるさかったみたいですけど、遷都に伴い色々と緩めたみたいですよ」

「東京はもう京都のベッドタウンね。まるで去勢されてしまったみたい。しかし私が京都にいたころはあそこまでうるさくなかったと思うんだけど……」

「ひとつ聞いてもよろしいですか？」

「なんででしょう？」

「小泉さんはどこからいらっしゃったんでしょうか？」

「うーん、まあ、今はもうないところ、かしら」

「ない、というのはどういうことですか？」

「そのままの意味よ。消えてしまった」

「失礼ですが、いわゆる限界集落とか、そういうところの出身なんですか？」

「まあ当たらずとも、遠からず、といったところね」

訝しく思った。田舎でこんな姿をしていたら非常に目立つ。

「そういうあなたはどの国からいらしたの？」

「生まれはヨーロッパの辺りです。でも日本にいる方がずっと長いから、国の言葉はあまり

話せません」

「へえ。そういえば、『ハーン』といえば、ラフカディオ・ハーンがいるわね。彼はギリシャ生まれだったかしら」

「どなたのことでしょう？」

「分からない？ 日本名は『小泉八雲』よ」

「ええっと、ああ、『怪談』で有名な方」

「そうよ。彼は日本を愛していた。……今の日本についてはどうかは分からないけど」

「あなたも『小泉』ですよね」

「そうですね。でも私は日本生まれよ」

小泉さんは私の顔を見つめてそう言った。思わず顔を床に向ける。少し気まずく思ったが、幸いそれ以上は突っ込んで来なかった。

そこで大崎に着くことを知らせるアナウンスを聞いた。

「降りましょうか」

そう言って席を立ち、降りた。降りてから後ろを振り返り、小泉さんがいるのを見てほっとする。そのまま、りんかい線に乗り換える。階段を降りる間、私は後ろを振り返ることはなかった。

そしてホームで七分ほど待ち電車に乗り込んだ。今度は私から席に座った。小泉さんも隣に座る。

りんかい線は海外からの観光客に人気のスポットらしい。駅やその周辺ではなく、路線そのものが人気というのも変な話だが。というのも、昔とは違って車窓から海中の景色を見ることができるようだ。しかし水深五十メートルでは真っ暗だから『ヒロシゲ』と同じように、コンピュータ・グラフィックスで構築された深海の映像をカレイドスクリーンに映し出しているというオチだ。

奇妙な姿をした深海魚が車窓ににじり寄ってくる。鏡を見ているようだ。生物分野は詳しくないけれど、実際の海洋生態系を反映したものだろうか。それとも誰かのイメージを投影したもののだろうか。『ヒロシゲ』にしてもりんかい線にしてもそうだが、乗車中と

いうのはよほど無駄な時間だと見なされているのだろう。こういう時間は嫌いではなかった。でも今は嫌いだ。嫌いではなかった、という事実と共に理由を思い出してしまふから。

「どうかされたの？ 顔色が悪いわ」

「いえ、なんでもありません。なんでもありませんから」
顔を背けた。窓の方に顔を向けたくもなかった。

痛む頭を持ち上げ、目線を天井の方に向ける。こうでもしなければみっともないところを見せってしまう。

「どうかされたの？」

慌てて頭を下げ、あちら側に顔を向けた。

「大丈夫？ もう着きますわ」

「え、ええ」

助かった。

「本当に無理なさらないで。今からでも帰って頂いてもいいのよ」

「いえ、大丈夫ですから、本当に」

他意はないのだろうか少し横着なのではと感じてしまった。私も人のことをどうこう言う人間ではないけれども、距離の保ち方ぐらいはわきまえているつもりだ。……しかし小泉さんにそういった少し強引な振る舞いをされると、ほんの少しだけではあるが、面影の重なりを感じてしまう。少し大きくなった子同士が、互いに胸のあたりに視線を向けながらも、手と手をつなぎ合わせるように。しかし指が絡み合うことはないだろう。

「どうかしました？ 私の服に何かついていないのかしら？」

「なんでもありません」

「ビッグサイトに来るのは初めて？」

「ええ。意外と駅から距離があるんですね。目の前にあるものだと思っていました」

「歩かせてしまって申し訳ないわ」

「いえ、いいんです。歩くのには慣れていきますから」

小泉さんの後についていく。慣れていないのは歩くことなどではない。

「毎年一般参加しているんだけどね」

「一般参加？」

「あ、ごめんなさい。コミックマーケットって知ってるかしら」

「まあ、名前ぐらいは」

「いわゆる同人誌即売会ね。それと似たようなもの」

「ふうん」

入り口には多くの人が並んでいた。最後尾につく。

「入場料とかはいるんですか？」

「いらないけどカタログはいるわよ。心配しないで。すぐ買えるから」

タブレットにカタログをダウンロードしてもらう。表紙に書いてある文字の下には可愛らしい女の子のキャラクターのカラーイラストが描かれている。ページをスライドしていると開場を知らせるらしいスタッフの声が聞こえた。

「良かった、あんまり待たなくて良くて」

入場の際して特に問題はなかった。皆鍛錬されているのだろう。場違いなのは私だけだ。ただ、疎外されているとかそんな感じはなかった。彼らや小泉さんと同じく、私も非日常の一端に触れてみたかったし、それを許容しないほど狭量ではないのだろう。

ビッグサイトのエントランス。様々な衣装に身をまとった人たちを撮影するカメラマンたち。とりわけ多いのは、肩から脇にかけてを露出させた赤と白の巫女服を身につけ、頭に赤いリボンのようなものをつけたキャラクターと、黒い三角帽子をかぶり、白と黒の洋服を着た魔女のキャラクター。

ゲームやアニメは詳しくないが、有名なキャラクターなのだろうか。

「どなたの作品なんですか？」

「宇佐見董子。まあ、知らないわよね。あなたが生まれるよりずっと前だから」

「うさみ」

「汚水の入った洗面器に顔を押し当てられたような感覚。どうしてここでその三文字が出て

来るのだろうか。言葉が出て来ない。体が震えて来る。大団円の後の、悲惨な結末を目にしたときのような。

「? 何か変なことを言ったかしら?」

「いえ」

「少し体調が悪そうよ。休みましょう」

「大丈夫です。本当に」

「全然そうは見えないんだけど。途中で倒れられたりしたら私も共犯者になっちゃうから、助けると思って休んでももらえないかしら」

「……わかりました」

一度大きく息を吸って、吐く。

「歩ける?」

「ええ……」

駅まで戻る。来るよりも随分時間がかかっただろう。近くの喫茶店に入る。

「本当にごめんなさい」

小泉さんは今度は本当に申し訳なさそうに言葉を紡いだ。

「いいんです……私が悪いんですから」

「そんなことはないわ」

私は言葉を返さなかった。本心とは違うことを伝えたのは、少し意地悪かな、とは思ったが。

「何でも好きなものを頼んでね」

「じゃあ、紅茶を」

「私も同じものを頂こうかしら」

私は黙っていた。運ばれて来た紅茶を口にして、ようやく口を開く。

「さっきはすみません。宇佐見、と仰いましたよね」

「そうよ、宇佐見董子」

「詳しく教えてもらってもよろしいでしょうか」

下顎に手を当てながら、小泉さんはつまらなそうに話し始める。

「昔々、ある少女がいました。その少女は『夢』を見ることができました。でも、彼女は少女ではなくなかったので『夢』を見ることができなくなりました。だから彼女は『夢』の内容を世間に開陳することになりました。結果『夢だったもの』は大人気となりました。……皮肉なものね。失われた後によくやく世間はその存在を認めるに至った」

「その『夢』の内容がああ作品だと？」

「どうでしょうね。夢は見ている間は本人にとって現実だけど、目覚めて想起したら他人にとっても『物語』になる。いくつもの脚色が付け加えられた、ね」

「つまり、同じものではない？」

「ええ。私の故郷は人々の想像の大海原に解放たれてしまった。『忘れられたもの』は広く認識された瞬間、『忘れられたもの』ではなくなる。そしていくつものノイズが混じる。私の故郷はあくまでも純粹で、非常識で、忘れ去られたものでなくてはならなかった。でも『物語』は『事実上の現実』なわけでしょう？ だから思いを通さない論理的な壁は、やはり

思いという槌によって崩れ去ってしまったの」

「ノイズ、とは？」

「雑音、というよりは解釈の違い、と言ったほうが良いかしら。車椅子の物理学者も言っていたわね。客観など存在しない。主観こそすべて。意識と現実は無価値だって」

「相対性精神学を学んでいる私が言うのもなんですが、私も小泉さんも今ここに、確かに存在しています。そこに解釈なんてものが入り込む隙間はないのではありませんか？」

「ねえ、『現実』とかいうものにしたって、大多数の主観によってピントが合わされている、どこまでも主観的で、なおかつどこまでも相対的な『解釈』に過ぎないんじゃない？」

あの体験を思い出していた。

「様々な解釈が許容されるのならそれらは決して収斂することはなく、様々なイメージがあるならそれらは単一のリアルを形作ることはない。そして私たちが誰かのイメージではないなんてどうして言えるのかしら？」

「そんなこと、誰にもわかりません。それに、董子さんが発表したイメージは変わらないは

ずではないんですか？」

「彼女とて全てを再現できるわけではない。それにさっきも言ったでしょう？ 夢は起きたら物語だって。そして細部は人々の想像に委ねられた。これまた皮肉なことに、それが結果として現実を消し去り、逆に物語として人々の中で生き続けさせることになったわけ」

「口承文芸のようですね……本当は単に教訓を伝えるに過ぎなかったものが、世代を経るにつれて物語に変容していく」

「そうね……でも時々考えるの。『本当』なんて、本当に存在したのかしら？ 六十年前、百二十年前、百八十年前、いや、それよりも遙かに前かもしれない、『本当』の故郷はどうに私の記憶から散逸してしまった、いや、そもそもそんなものはなかったんじゃないかとまで思ってしまった。この世界ではイメージとリアルはきつと同じなんでしょう。でもイメージの中に書き込まれた私と、今ここにいる、確かにいる私は違う。もしこの瞬間の私が一秒後の私とまるっきり違っていても、そう信じたい」

小泉さんは俯いた。その表情を読み取ることはできなかった、いや、許されないだろう。

巨木の記憶を幹に手を当てて読み取ろうとするようなものだ。

「……でもね、本当は私は誰からも忘れ去られたいの。そうすれば楽になれるんじゃないかって。しかし、それは決して許されないことだと思うの。ゆえに私は『本当』のイメージを見つけて出すために人々のイメージの中を酔歩し続けるしかない。大海原からたった一つの水分子を見つけ出すため、塩辛い水を口に含み続けるしかない」

何も言えなかった。

「寂しくないんですか？」

「寂しいのは、私じゃないわ」

理解した。いや、やはりそれはおこがましい。それほどに、この人は故郷を愛しているのだ。

「……私も時々、あなたと近い考えが思い浮かびます。とてもあなたに近づくことはできないけど……」

「苦しくないの？」

「いえ。でも……」

蓮子は言っていた。主観が真実などではない。主観の外に信じられる、絶対的な客観がある。夢と現実の違い。だから夢を現実に変えようと努力できる。だからこそ、子供達は笑うことが出来たのだと。

でも私も小泉さんも笑うことなんてできなかった。蓮子の言葉はある一面で正しい。私は辛い仕方ですれを学んだ。だからその言葉は人をひどく傷つける。誰であろうと眠りから醒めたくはない。翌日には辛いことが待っているときであっても床に就いてしまう。

小泉さんは蓮子の言葉をどう思うのだろうか？ もう十分に、癒えることのない傷を負っていて、これからもいばらの中を彷徨い続けるというのに。

「お代と帰りの電車賃はここに置いておくわ」

「……ええ、ありがとうございます」

私はそれ以上何も言えなかった。小泉さんは帰り際、こちらを見て初めて微笑み、そして出て行った。

入れ違いに入ってきた人物にマスターが会釈をする。彼女はこちらに来て先ほどまで小泉さんが座っていた椅子に腰掛ける。

「ねえ、メリー」

私は目を合わせることも、答えることもない。

「私が間違っていた。私の言葉がメリーを苦しめるのなら、私は喜んであの主張を撤回するわ」

「……………」

「どうしたの？ メリー」

「あなたは誰なの？」

「人の求める、収束したイメージ」

「イメージとは移ろいゆくものでは？」

「移ろいゆくものも、あなたやあなた以外が求めるのなら収束を開始するわ。それが本当に収束するか発散にいたるかは保証できないけど」

「リアルは確かなものではないの？」

「リアルとはすなわち収束し始めたイメージ。どこまでも主観的で、なおかつどこまでも相対的な解釈物」

「蓮子はそんなこと言わないわ」

「それはあなたが勝手にイメージしていて、イメージしていた『蓮子』」

「蓮子はもういない」

「ヴァーチャルとリアルは不可分。過去に戻ることで、未来へ行くことで、できるものの」

「じゃあ私たちはなぜ今を生きているの？」

「私たちは観測する者であり、同時に観測される者。解釈しては、解釈される。『今』なんて問うこと自体が無意味」

「それなら私は誰なの？」

「あなたも、『マエリベリー・ハーン』」

目が覚める。そろそろ浜松を過ぎる頃だ。明日は例大祭。私はマエリベリー・ハーン、彼女は宇佐見蓮子のコスプレをする予定だ。彼女と最初に会ったのは京都の大学時代だった。確かに初対面だったのだが、声をかけたら意気投合し今に至る。

ひととせ
星見広場の桜岩

それは冬至の話であった。

十二月も半ばを過ぎ、足早に人里を駆け抜けていく乾いた風に、体を底冷えさせながら、すわ忘年会をどこでしようか、と魔理沙が作戦会議をしていた時である。

同じくして団子で熱い茶を一服していた雷鼓が、口を開いた。

「じゃあ、星見広場にしましよようよ」

「ああ、あそこか」

妖怪の山の、五合目辺りに変わった広場がある。常緑樹林を使って外郭が形作られた、南に面した広場であった。景勝地の一つとして数えられている。とりわけ変わったのは、扁平な岩が中央付近に鎮座している事である。

そんな広場なものだから、運動するには狭く、結果、時折現れる妖怪の山周辺に住んでいる人妖が月見酒をする場所となっていた。

「まあ、月見酒もオツなものだ」

魔理沙のその一言で、忘年会の会場は星見広場となった。

『悪事 千里を走る』

などと言うが、宴会の報告はそれ以上だ。

魔理沙はまず考える。

酒は何を持って行くか。これは安酒でいいだろう。高い酒は紅魔館と守矢神社に、珍しい酒は永遠亭とかに任せればいい。

一方、酒の肴はそうはいかない。酒ではコネクションが物をいう世界でもあるが、肴となると個人の人生単体が問われる。

無論、魔理沙は年若い。そこまで貴重な物を要求されるといふ事はないであろう。一方、仁を尽くせば誰かが何か得られるだろうというのは、経験として知っている。気遣いの世界、という訳だ。

(そういえばあの広場って)

南を向いている。

幸か不幸か、山から吹き下ろしてくる山嵐や出し風の類はこない。それでも、妖怪の山五

合目ともなれば雪もそれなりにある。雪をどうにかしたとしても気温は避けられない。

「そうだ、汁物だ」

寒い季節。五徳を持ち込んで鍋を前に酒を一献。まずいわけがない。

「よし、そうしよう」

そうと決まれば魔理沙は人里を駆けめぐった。

さて夕刻。

五徳が五基、大鍋が八個、爛をこさえる為の鍋が五個、そして寸胴鍋が二つ、広場に並んだ。大量の炭と食材も山盛りになっている。

「……鍋、多くね？」

「私としては寧ろ、小型の五徳まで持ち出すだなんて考えてなかったよ。せいぜい、火鉢程度だとばかり」

「藍、おまえだったのか」

割烹着を整えながら、調理台の支度をする藍。

「まあ、二人して鍋をこさえようじゃないか。何作る？」

「豚汁」

寒い風に吹かれて冷えた体に五徳の火と熱燗。そこへ赤味噌ベースの手前味噌をきかした豚汁を流しこむ。不味いわげがない。

「そうか、それはよかった。私は白味噌のしじみ汁だ」

甘い酒、辛い酒、辛み系の豚汁に甘味系のしじみ汁。なにより、しじみは二日酔いに良い。こうなると香の物も欲しい。

五徳が火を噴いた。

囲炉裏と焚き火が灯され、暖を取りながらの調理となる。暗くなる天の帳に、火の明るさが望ましい。

「そーいやさ」

魔理沙が突然、口を開いた。

「あの扁平な石。桜岩ってんだろ？　なんでそんな名前なんだ？　取り立てて桜色してるわけでもなし、桜が降ってくる場所でもない。そもそも、広場の周りに桜がないだろ？」
そう。

この広場は有志の手入れだけであり、草は伸び放題となっている。が、基本的には草原の類であり、樹木は生えていない。外郭を形作る常緑樹ぐらいであった。

いつしか星見広場と呼ばれるようになり、桜岩と呼ばれるようになった。
ただし、藍には聞き覚えがある。

「なんでも、昔その岩が桜色に——」

「古人に曰く、『且しほく一壺の酒に対し、澹然たんぜんとして万事閑ならん』」

藍の言葉に割って入ったのは、要石に乗ってやってきた比那名居天子であった。

「どういう意味だ？」

「お酒があるんだから気楽に過ごしましょう、って意味だよ」

「『歳月人を待たず』ってね。さあ、桃酒よ。飲みましょう?」

「さすが天人さま」

いつもは口うるさい古典引用も、今回ばかりは賞賛の言葉しか出てこない。小さな桶で雪をすくって、そのまま桃酒をつっこむ。頃合いになったら、豚汁を暖める火で暖を取りながら冷たい桃酒を一献。

美味い。

豚汁ができていない事だけが残念であった。

「あ、もう始めてる!!」

と言い出したのは誰であったか。その言葉を皮切りに、熱燗も無ければ味噌汁も無いままに、宴会が始まった。

談笑、一芸、そして弾幕。

季節外れの花火に似た弾幕が、パッパッと咲いては溶けるように消えていった。

「ヤッホー」

「おお、遅いじゃないか」

遅れて、雷鼓がやってきた。手には一升瓶が一本。それに、変わった石像を持っていた。壺を抱えた乙女のようなすらある。

「なんだそれ？」

「太鼓」

壺の部分に革が張ってある。これが膜になり叩けば音が出る、という事であれば、なるほど確かに太鼓であろう。名を冠するのであれば、さしずめ乙女太鼓であろうか。

「鳴るのか？」

「私を誰だと思ってるの？ 太鼓に限れば、ここにいる誰にも負けないわよ」
「だけどね、と自信を見せた雷鼓が相談を持ちかけてきた。」

「これ。見つけた時から彫ってあったのだけど、何が何だかわかんなくて」
「言っ、石像の背中を見せてきた。」

『若有慕情懐心跳』

そう書いてある。

「何？ 詩文？ そういうのは天人の私に任せなさいな。え〜……『若し慕情を有すならば、心の跳ねたるを懐かしめ』だってさ」

何が何やらサッパリである。

魔理沙が太鼓を叩いてみる。小さな音が軽やかに鳴った。素人が簡単に叩いても小気味いいのだから、雷鼓が叩けば、それはもう、いい音になるであろう。

一方で、藍である。

石像の文章がわからないほど、愚鈍ではない。むしろ意味を正確に理解しているであろう。創造性に劣る、という評価であるが、逆を言えば再現性に富んでいるということでもある。この文章を読み、一体、何を思うのか。

「どれ」

藍が二度三度叩いた。

途端、周囲のザワつく声が響く。振り返って見れば、扁平な桜岩が——その名の通り——

桜色に輝いたのである。

どうやったのか。

人は口々にそう聞いたが、藍には説明が難しい。何より魔理沙も見ていた。藍は太鼓を叩く以外、何もしていない。隠すには巧妙で有りすぎるし、何より、桜岩点灯を起点とした事件の予兆となる。この女は、飲み会にそのような物を持ち込む野暮な女ではないし、主人たる紫や抜け目ない幽々子を出し抜いて深謀遠慮な罫をしかけるほど剛胆ではない。

純粹に、太鼓を叩いただけなのだ。

だというのに、魔理沙とは違い、桜岩点灯に至った。この違いが、一体、どこにあるのか。魔理沙には検討もつかなかった。

さて、ここで実験会が生じる。

点灯せしめたのは、紫、幽々子、鈴仙らであった。逆に点灯できなかったのは、チルノ、純狐、魔理沙である。今も数名が試しているが、やはり不可能だった者も数名いる。

その違いが何であるか。

策士の九尾が思い至った。

「雷鼓」

と呼びつけて、耳元で何事か囁いた。

途端、雷鼓が耳まで赤くなるほど頬を染めた。一言二言、何か言い返してやろうかと思っていたようであるが、口元に力が入らず、それも上手くいかない。

「ホラ、早く早く。貴方が一番上手く叩けるんだから」

藍に後押しされて、雷鼓が太鼓を叩いた。

桜岩が点灯した――。

拍子としては、まったく同じ速度である。毎分七十打。人を安息させる――ともすれば眠りに付きそうな速度であった。

「あの太鼓は桜岩を削って採れた石でできていた。奏者の心情を写し、太鼓がそれを響かせ、桜岩が「反応する」

理屈でいえば、そうなるであらう。

「ははあん。なるほどね」

これに対し、最初に合点がいったのは天子であった。同時に、桃酒を飲むのを中止した。この音で酒を飲むのは無粋であると判断した為である。

「ん……む……」

次に大きな反応を示したのは、魔理沙であった。

何やらむず痒い心境を得ていた。音の影響を受けて想起されたこの感情は、悪くはないのだが、あまり長居をしたくない。

そうそうに立ち去ることにした。

魔理沙が空に行く。

空には満点の星々があった。オリオン座が勇猛果敢に棍棒を振り上げている。

魔理沙がふと、視線を下げた。

「ああ、そうか……」

視界に入ったのは、宴会をする面々。明るい焚き火と、点灯された桜岩。星見広場を一望

できる程に離れてても聞こえてくる不自然な太鼓の音。

「神々が恋する幻想郷も——」

新緑に似た若い髪を畳畳と広げて見上げている。頬を染めているのは、桜岩を削って出来た頬紅か、好いた男を見る慕情か。跳ねる鼓動も自然と落ち着きを手に入れる。

「——星に恋をするのか」

糠星に見とれる、女が一人。

榑狛太郎

ゆきあはせ

「一輪、どうかしたのか？」

橋を渡り終えようというところでびたりと足を止めた連れに、啞えタバコの藤原妹紅は怪訝そうに問うた。

雲居一輪。濃紺の頭巾を背にずらし、手すりを両手で掴んでじっと川を見下ろしている。妹紅の問いに応じる素振りすらない。いよいよ怪しく思った妹紅はそちらへ戻りつつ、――「あっ、おい！」

突如欄干に足をかけ、墨染めの袈裟を翻し川へ身を躍らせる一輪。妹紅は慌てて飛空の術を使い一輪の後を追った。

ふわり、と川岸に降り立つ一輪、が、足早に駆けてゆくのを空中から認めると、妹紅はその行く先に視線を向けた。草むらに岩がある。

岩。ただの岩ではない。無数の小石を集めて固めた、いわゆる「さざれ石」である。それまただのさざれ石ではない。

「ありゃァ曝れ頭じゃねえか」

さざれ石の真ん中に見える白いものは、遠目にはそれとはっきりわからぬけれども、人間の頭蓋骨である。妹紅は体を傾けると、一気に滑空してさざれ石に迫った。

まじまじとさざれ石を見る。さざれ石は長い年月を経て石灰成分等が凝固して形成される。してみれば、頭蓋骨は相当古いものであるはず。

しかし。

「人柱だな」

声。妹紅の振り返る先、何とも言えぬ表情の一輪がいる。妹紅はさざれ石を再び見た。そして手で触れてみた。

コンクリート。

妹紅は川を見渡した。そして橋を見上げた。川幅は広く、橋の造りは頑丈である。今でこそ護岸工事が為されているが、雨が降ればこの川は里人に大きな被害をもたらす荒ぶる龍神となった。当然橋はその都度流された。渡ろうと思えば、弾幕少女ならざる人々は舟を使わねばならなかったのである。

「今の橋のものではあるまい」

一輪は妹紅の唇からタバコを奪い取ると、一口深く吸い、ふーっと濃い煙を吐いた。

「水妖に死骸を冒されぬための措置だろう。立てた人柱が妖怪の餌食となるから橋が持たぬと思ったのだろうな」

吸殻を妹紅の唇に返し、一輪は曖昧に笑った。

妹紅は吸殻を啞えたまま、一輪の目を見つめていた。やがて口を開こうとして、ようやく吸殻に気づいたらしくムッとすると、――

「言われぬでも念仏を上げてやるさ」

文句を言う前に一輪に言われてしまう。妹紅は洗面を作ると、吸殻を霊気の火炎で焼き尽くした。

「橋番の爺さんと呼んで来る」

ぶっきらぼうに言い捨てると、妹紅は腰に差している白木の短刀で藪を切り払いながら行ってしまった。

「爺さん！ ちょっと来てくれよ！」

顔と言わず腕と言わず茅の引っかきキズで血だらけの妹紅。彼女は短刀をズボンでいい加減に拭いパチンと鞘に納めると、岸辺から声を張り上げた。

橋のたもとに立っていた橋番の老人は驚いてそちらを見た。そして妹紅の様子を見て更に驚いた顔をした。

「どうしたんです、キズだらけじゃありませんか！ 今薬を、」

「要らねえよ、俺ア不老不死なんだよ。それよか爺さん、一輪が念仏上げるから付き合ってくれよ」

念仏、という言葉に、老人は更に顔色を変えた。

「死体が上がりましたか、」

「そうじゃねえけどそんな感じだな。あ、警邏の白狼天狗は呼ばなくていいぜ、ホトケさんもう骨になっちまってるからな」

老人の手を取ると、妹紅は藪をズンズン戻っていった。途中から強い線香の匂いが妹紅と老人の鼻を打つ。

一輪は地面に座り線香を焚き、経典を広げている。妹紅が橋番の老人を連れてきたのをちらりと確認すると、詩歌を吟ずるように朗々と念仏を唱え始めた。妹紅は手を合わせつつ老人に視線を向けた。

「土左衛門が上がったんじゃなくてな、石から骨が出てきたんだよ」

「石から、」

「昔橋を架ける時に立てた人柱だろうよ」

老人は大きく目を見開き妹紅を見つめた。そして今気づいたようにさざれ石に視線を向けた。妹紅は苦笑を浮かべつつ、

「今の橋じゃねえよ。ホトケさんも流されちまった橋の橋姫させられてるんじゃ堪んねえだ

ろうからな、って、おい、」

老人は妹紅の言うことなど耳に入らぬ様子でさざれ石に歩み寄っていた、と見るや、突如大きな声を上げてその場に倒れてしまった。

妹紅は慌てて老人に駆け寄った。幸いにして老人の倒れたのは草の上だった、が、彼を抱き起こした妹紅は顔を強張らせた。

「脈が、」

不死人・妹紅の言う「脈」とは血液の流ればかりではなく生命力そのものを意味する。彼女は経典を打ち捨てこちらに駆け寄ってくる一輪に、

「線香三本と酒だ」

短く命じた。これに対し一輪は訝しがる様子もなく要求の品を渡した。

「他には？」

「死神小町を『一回休み』にして来いって言いてえところだがな」

「そんなに悪いのか、」

「だから反魂の術を使うんだよ」

ぎょっとする一輪に目もくれず、妹紅は火のついた線香を噛み砕くと、スキットルをぐつと煽った。そうして虫の息の老人に口移しでこれを飲ませた。

「応急処置にしかならねえが、まあ仕方ねえ。一輪、雲山の爺様を呼べ。俺とてめえじゃ橋番の爺さんを小屋まで運べねえだろ」

「……反魂の術とは死者蘇生の魔術だろう？」

「俺に出来るのは寿命のアディショナルタイムを設けてやるくらいのものなんだよ。本気で死人を蘇らせようとすりゃ、白玉楼の死霊御嬢か邪仙青娥か、そうでなきゃレミリア嬢でも呼ばなきゃなんねえよ」

一輪は何とも言えぬ顔をして友人を見た。が、こっくりとうなずくと、嵌めていた金の腕輪——緊箍児を外し、その輪の中に向かってふーっと煙を吐いた。

橋番の小屋は、ほとんど小屋とも呼べぬほど簡素で狭い。たった二畳ほどのスペースには、火を熾すような場所さえない。雲山はもちろんのこと、橋番の老人を寝かせ、その脇に妹紅と一輪が座っても定員オーバーとなる。

「爺さん、残酷なことを言うが、じきにあんたにやお迎えが来る。これも何かの縁だ、言い残すことがありゃ、この藤原妹紅に言ってくれ。なけりゃそれでいい、妖怪尼の念仏で済まねえが、御浄土へ案内してやる」

老人の耳へ口を近づけて妹紅が言う。老人は見えているのかいないのかわからぬ目を天井へ向けたまま、空気の抜けるような幽かな声で答えた。

「……骨を……一緒に埋めて下さい……」

「骨？」

「……今の骨と……」

妹紅と一輪は顔を見合わせた。が、末期の言葉である、ただ「わかった」とだけ答えた。老人は安堵したように目を閉じた。そのまなじりから一筋、涙が流れる。

「……あれは妻の骨です……わしにはわかります……言いつけを破り喋ってしまった……ここであったことを誰かに喋れば命はないと……しかしそうしなかった……出て行ってしまった……」

妹紅と一輪はふたりして押し黙り、老人の声に耳を澄ませている。

「……最後に子らを大事にしろと……子供達はみな立派に育ってくれた……渡し守になればもしやと……妻とはここで会ったから……橋が出来てわしは橋番になった……ああ……」

震える唇がわずかに歪む。声色に喜びが滲む。

「……妻は……お雪はずっとここにいたのだな……！」

老人は長い息を吐くと、それきり何も言わなくなった。

一輪は老人の安らかな顔を確認すると、手を合わせ短く念仏を唱えた。そうして腹部で老人の手を組ませ、袈裟の隠しから白い布を取り出し顔に乗せた。

「妹紅」

一輪は妹紅に向き直った、瞬間、妹紅にひしと抱きつかれた。一瞬面食らったものの、すぐにふっと微笑むと、震える背中を優しく擦りつつ口を開いた。

「人間は難儀だな」

「……うるせえ」

一輪の胸に顔を埋め涙声で悪態をつく妹紅。一輪は優しく笑った。

と。戸を叩く音がした。仰天した妹紅が慌てて袖で顔を拭うのを尻目に、一輪は立ち上がり戸口に向かった。

頭を出し左右を確認する一輪、が、戻ってくる。懐紙で涙をかむ妹紅に怪訝の目を向けられ、一輪は苦笑でこれに応じた。

「風の音だ」

「風？」

妹紅は一輪を押しの外を見た。

季節外れの雪が降っている。

妹紅はしばらく無言で雪を見上げていた。が、やがて「そうか」とぼつりと呟いた。怪訝そうな顔の一輪の、その隣に膝をつくと、妹紅は吹き込んだ雪に飛ばされた白い布に手を伸ばしつつ口を開いた。

「妖怪が御浄土を踏めるかは四季映姫・ヤマザナドゥの決めることだ。だが爺さんも、爺さんの子供十人とも人間だ。カミさんだって爺さんと一緒に極楽へ行って問題ねえはずだ。そうだろ、一輪」

「……………」

「けッ、ウッでも『そうだ』って言えよ」

ぐいと目を袖で拭う妹紅に、一輪は優しい表情を浮かべその背中をぽんぽんと叩いた。

「そうだな」

「遅えよ」

ニッと笑って妹紅が答える。一輪もくっくっくと笑ってこれに応じた。

「然るに、墓石には名を刻まねばならん」

「慧音か、阿求にでも確認するけどな。確か爺さんの名前が、」

老人の顔に布をかける、前に、その安らかな顔を再び確認してから妹紅は呟いた。

「――『巳之吉』つつたっけ」

藍もどき 十六夜月報

野分たる夜とあるが、この中を京都から兵庫まで走ったという使者は、さぞ使命に燃えていたのだろう。ごうごう風が抜けわたり、表に不用心に置かれてあった品を飛ばして来たのだと察せた。がらんがらんがつん、閉じた鎧戸に何かが当たった音で、私は何とも言わず、修理が必要かを確かめる。窓のない館と言われているが、必要最低限には備えられている。不具合は無いよう見えた。

天狗の新聞がこぞって今夜の嵐を報じていた。この郷に台風が訪れることは稀で、百年ほどは前回から間があるとか。買い出しに人里の商店を巡ったが普段と変わることなく、新聞は届いた傍から焚口や包みに使われていたように思う。ただ、最後に立ち寄った神社では、祈祷の準備をしていた。この嵐が何かしらを起こさずに過ぎ去ることを神々に願うのだと巫女はぼやいていた。ご苦労様と言いつ置いたが、職務だから仕方ないと返事をされて、それ以上には言えることはなく、早々に退散した。

さて、そちらへ意識が傾いたところへ、再び鎧戸が殴られた。私は小心者である。おおと声を上げて跳び上がった。すると「咲夜が不意を打たれた姿は貴重ね」と、お嬢様がこちら

を見上げていらっしやった。「お散歩でしようか」とお伺いする。常ならば、そろそろ宵の散歩へお出かけなさる頃合なので、私はこの嵐であつてもいらっしやるのかと考えた。お嬢様は「やめておくわ。余計な相手と出くわしてしまいそうな気がするからね。それよりも咲夜。コロッケを食べたいわ」と仰つた。

お嬢様のおねだりとならば、私はすぐに用意する。クリームコロッケのトマトソースなど、洒落を利かせる必要はない。お嬢様が求めるコロッケは、申し訳程の挽肉が適当に潰されたじゃが芋に混じる、ウスターソースをたっぷりかけて食べるものだ。ちよつとした種なし手品を用いて、お嬢様には一瞬で取り出されたように、コロッケを差し上げると、お嬢様は作法通り手掴みで食べだした。「半分は。いえ、残すことはないか。同じく作ればいい。揚げ物は揚げたてがいいからね」と、何かが見えているだろうことを呟いていらっしやったが、私には気味が悪いこととしか思えない。我が主人ながら、こういう先を見通せてしまう厄介な部分は、お嬢様ご本人と同じく、私も嫌だと思う。霊夢は、例の神社の巫女は「おもしろい」の一言で済ませてしまった。この差は何だろうか。問いかけたことはない。霊夢も、先

が見通せてしまうことがあるので、気味が悪いことがあるからだ。美しい黒髪を靡かせ、颯爽とこの館を蹂躪した巫女の普段は、彼女が演じるよう、気味の悪さに満ちている。だから、私とお嬢様は神社へ通い、そのうちに私は霊夢に魅了されていた。

コロッケを食べ終えたお嬢様が再び、こちらを見上げていらっしやう。「また霊夢のことを考えているね」と、口の端をあげていらっしやる。「そうです」と、私は胸を張った。お嬢様には、私の思慕を打ち明けてある。許しを得てから、霊夢に私は告白した。神社の巫女に懸想する者は多いと聞いていたが、一番乗りという栄誉を達成した私は、霊夢と親しく過ごす時がある。だから、主人の前であっても恥じることはない。それはどちらへも失礼だと思ふのだ。「こうも風が強いと心配になります」と私は正直に続ける。「今見に行くことは許可できない。もうすぐ風が来るが、それは目というものだ」というお嬢様の言葉に頷いた。この郷は科学から逃れて来た者の終の棲家だが、天候に関する知見は広く浸透している。台風と言う英語に基づく言葉は、遭遇は殊になくとも、住人たちはそれをよく知っている。そしてそれにほっかりと、雲の穴があるということもだ。かく言うも、私は外に在った時に実

際の体験があるので、お嬢様へ即応したにすぎない。霊夢はどうだろうか。「そう」の一言だろう。泰然自若という語は彼女のためにある。

風が来た。ぴたりと止まった風鳴に、お嬢様はふむと唸って「次に風が始まったら四時間ぐらいだね。だいたい夜明けぐらい」と仰った。私は館の周囲に異常がないかを確認に走る。物が当たった鎧戸は破損なく、屋根も壊れていなかった。庭園に惨めなバケツが転がっている。底の抜け、歪んだバケツは、館内へ戻る頃にまた荒れだした風に消えてしまった。あのバケツに私は妙な親近感があった。ただのバケツ、それも用をなさない存在だ。風の行き着く先で朽ち果てる、先のことが見える。先のことが見える気味の悪さと、底抜けと歪みが、私に親近感を持たせたのかもしれないなかった。お嬢様へ「異常ありません」と報告する私の頭の中に、それはこびりついてた。お嬢様は静かに首肯なさり、紅茶を所望された。「カップは二つ用意なさい」となれば、この風雨の中で客があるということだ。「魔理沙ですか。八雲の胡散臭い方ですか」と訊ねた。前者なら苦く淹れて砂糖と牛乳をたっぷり、後者ならば香を甘く感じるほど強くという好みがある。お嬢様は味と香の均衡が重要だ。「魔理沙なら

いいんだけどね」というお嬢様の嘆息と「見回りに来ました。大事はないようですね」という声が重なる。声はお嬢様の執務室であるこの部屋の扉の外からだった。門番の美鈴ではない。ずっと胡散臭く、ずっと気持ちの悪い妖怪の声だった。姿を見せない方が気持ち悪さが薄まるという性質は、彼女しか持ち得ないだろう。「咲夜。詳しく報告をなさい」の主人の命。私は屋根、外壁、数少ない窓、地下の防水、敷地内の樹木、その他の順に現在のところ被害がないと、箇条書きのぶつ切りで述べ、「前庭に転がっていた破れバケツが飛ばされたこととですわ」と付け加える。あのバケツはどこから来たのだろう。底が抜けていなければ拾っておいた。「ありがとうございます。次がありますので、これにて」扉の向こうにあった気持ち悪さがなくなつて、彼女が去つたことがわかる。「忙しない。咲夜。紅茶はカップ一つでいいわ」という変更に、私は承服した。

日の出る直前に、お嬢様から神社の様子を見に行くように指示が出た。嵐は過ぎ去つて、山の際が赤くなり出している。春ではなく秋だが、雲の細くたなびく景は、なるほどと言つてみるしかない。しかし、気楽さは神社の参道が見えだしたところで霧消した。石段が斜面

に貼り付いている。その中程から下がらない。決壊している。私は焦りを押さえつけ、高度を取った。霊夢の拠点たる博麗神社は甚大な被害を受けていた。高くはないが丘の上にある社だ。その境内の半分が崩れ、流失している。人妖が集う、霊夢がサボるせいで草の伸び放題な庭がない。それに隣した、霊夢が茶と煎餅を楽しむ縁側を備えた社務所がない。本殿は、あった。それを支えるべき土が半分ほど流れていたが、建物自体は損傷ない様子だった。私は急ぎ本殿の、賽銭箱の横に降りる。それだけでぐらりとすることはなかったので、まずは安心を得た。霊夢は中で祈祷をしていたはずで、避難する暇はあったように思えた。だがしかし、どうして鈴の音が内から聞こえているのか。しゃなりしゃなり。決まった間をもって続く鈴音は、誰がたてているのか。私は濡れそぼる引き戸を力任せに開く。しゃなりしゃなり。私という闖入者に気付くことなく、陶然とした表情に固まった霊夢は舞い続けていた。事態が平時ならば、部屋の間にて拝するものだった。私は飛んで、霊夢の身体に腕を回すと、すぐに外へ脱する。「咲夜！ 祈祷を妨害するなんて、いい度胸ね！」やっと現に戻った霊夢へ、それは周りを見てから言えと怒鳴り返すと、ようやく彼女は状況を理解した。「うち

が、ない」その通りだ。「気付かなかったの」と問うと、さっき見た通りだという返事。祈禱の舞は神舞であるので、意識があるかないとの真ん中へ入り込んでしまう。強く止められたりということがなければ、周囲のことを判ずることはできないという。世の中には恐ろしいことが溢れていると、私は再び確かめる羽目になった。それにしても、この神社には二、三の居候があったはずだと言うと、折良く、いや悪く出払っていたらしい。「三度目は自宅かあ」という霊夢のぼやきは、幾度か倒壊の憂き目に遭っているこの神社の巫女らしい。「冗談じゃない。短い人生の、更に短い乙女時代に三回よ。ありえないぐらい小さな確率だと思わないのは、この頭か」と言つて、彼女は私の頭を掴み激しく揺すつて来た。残念ながら参拝の鈴のようにがらがらする頭ではない。ただ、何にせよ、霊夢の身に大事がなかったことは安堵だった。

霊夢を連れて館に戻ると、お嬢様が待ちかねていらっしやう。 「まずはお風呂を。美鈴に仕度させてある」とのお言葉で、お嬢様の先を読む気味の悪さが、また私の前にぶら下がった。霊夢を館に滞留させて良いものだろうかと言うと、「八雲はどこを見回っていたのかし

ら。博麗神社の倒壊、は、いつものことか」というお答え。「左様にございますね」としか言えなかつた。

神社の再建工事はこの日の午後から始まり、仲秋の月見の前日に落成となった。さすがの鬼も、土台から造り直すとなると一夜城とはできなかつたとのことだ。それでも被災から一週間で崩れた土砂を復元し、固め、失われた社務所を再建してしまうのだから、全て驚くしかない。その新築の霊夢の家で、例年通りに月見の宴が開かれた。家具やらの家の中身は八雲が揃えたらしい。そして酒は、今回ばかりは紅魔館で醸したものだ。お嬢様が洩る霊夢に押し付けた経緯があつたが、背に腹は代えられないということで、毎年作っては溜り込んでいたワインが振る舞われ、列席した人妖を喜ばせていた。「咲夜、明日は暇でしょ」その台所で宴会の後始末をしていると、会場から食器を集めて来た霊夢が言った。「明日は」言い掛けた私に、「暇なのだから、また夜に神社へ来なさい」と決めつける。いくら緩いと言われる私の脳味噌でも、霊夢が何かを企んでいることは判る。それも、私達にとって重要な企みだろう。「お嬢様に」としか言えない自分がとても恨めしい。しかし、霊夢はお嬢様と同じ

く先を読むことができる。気味が悪いと常々言っているのだが、言動にそれを出すのを霊夢は止めない。本人は先読みではなく勘だということらしいが、気味が悪いものは気味が悪いのだ。ここでも、その天賦ともてはやされる気味の悪さを発露し、「あんたのそこのお嬢様の許可はとったわよ」と、私の言うべき事を潰してみせる。やはり、こんな厄介な、気味の悪い娘の相手をできるのは私ぐらいだと自負して、翌日も夕方よりここへ来ることを約束した。

日暮れに神社を再び訪れると、霊夢は酒瓶を洗っていた。崩落に巻き込まれながら唯一生き残った博麗の酒だと霊夢は言って、丁寧に泥を流している。今夜はそれで一杯やろうというのだ。肴も用意されていて、大根の煮物が食卓に、台所では蕎麦が茹でられる時を待っていた。「天婦羅が欲しい」という霊夢に、ありあわせの野暮天になると断るも、彼女はそれがいいと言う。気味の悪い先読みができるというに、どうしても霊夢は気が回りきらないところがある。お嬢様もお嬢様で、こちらは輪をかけて酷く、わざと気を回さない節があり、従者どころか、お嬢様ご自身が盟友と頼んでいらっしやる存在も振り回してしまわれる。比べれば霊夢の方が可愛いとも言えるが、気味の悪さを増してしまうことに変りない。

かき揚げを浮かべた蕎麦をたぐり終えると、月があった。私の名、お嬢様から頂いた名と同じ月なのだ。霊夢がわざわざ私を呼び寄せたのも、おそらくはこの夕べを洒落て過ごそうというものだろう。年に一度の仲秋の十六夜に逢瀬へ立つ。さながら七夕の主役二人のよう
で面映い。霊夢はどうだろうかと見る。誘った当人なのだから、赤面することもないだろう
と思っていた。だが茹蛸がそっぽを向きながら酒瓶を寄越して来た。さっきまで、ああだこ
うだと井を片手に神社再建にあたって新たに加わった笑話を語っていた姿から一転していた。
何をあらたまったのかと問えば、酌をしろと言う。「今更、あんたと二人だと思っちゃまっ
たのよ」と言う霊夢の、瓶が握られた手に重なるよう、こちらの手を差し出してやる。「う
ぬ」なる鳴き声は、とにかく殴りたくなつたが、社へ入り浸る金髪の小娘が発する「めう」、
同じく金髪の、こちらは大年増による「にゆう」、香霖堂店主の「ぶるあ」など、禊を必要
とするものとは全く異なる。お嬢様の「うー」に匹敵する、清冽なものだ。私はにやついて、
霊夢の持つ杯へ注いだ。「何よ、気味の悪い」と言い返されたが、気味の悪さならお互い様
だろう。未来を見通しさえする勘働きを持つ巫女と、種なし手品をそこで披露する悪魔

のメイド。どちらも人里から見れば異物だ。人は、異物に耐えられない。だから、異物をこの郷へ押し込めた。館の知識人は生存戦略の好例と言っていたが、押し込められた先に、こんなにも気味の悪い、素敵な巫女が居る。だから、私は嫉妬心に似る感情を持たない。霊夢が傾けてくれたお酒は、とても美味しかった。この他に理由はないのだ。

(一△×季 神無月)

深紅香奈 信貴尼公

梅が香も盛りだのに、俵の幌を避けた細雪が俄、綿わた入羽織いれの袂を、鹿子斑かじらへ染め上げた。億劫、手で払うと、乾いた雪がさつと散りて、金沢のよりずっと軽い白粉こなおしろい、神代より降る、生駒の雪である。蹴込に浅く積り、緋毛氈を隠す雪は柔らかで、雲に立つ様にも見ゆる、踏締めて底の抜けぬか、そつと足を、浮かせ、下ろし、幾度と試みるたる後、落ちぬと知るや、天人の心地、何とも面映ゆい。ふと、昔説法で聞いた、摩耶魔訶経の一説で、御仏が雲に乗り、刀利天に住まう、摩耶夫人を訪ねた話が過るよき。殊更、何が言うでもあるまいに、頬がしま緊り、思わず居住いを正した。雲と言わば、これより志す朝護孫子寺も、白波と紛う、雲居に浮かんだ宝船で、護法の釵鎧童子は一輪、法の輪を回し、空疾る後には、細く絹雲を引くと云う。行く先を眺むれば、煙った雪の奥、銀鼠の、重い雲の切れ間より、一条、また一条、幽かに光芒が射して、信貴山へ道を繋いでいる。その観音力に圧され、自然、畏み手を合わせた。が、拝み手も、間もなく揉み手へ変ずる辺り、近頃暖かい日続きだのに、いや、今日はどうも寒い。

折しも、信貴山の裾は祭りの賑い、俵から乗り出し、耳を立てれば、飴細工、失物占、甘

酒、蓮葉商いだと、銘々が売り口上を競べて、客は、辻藝の怪技、矢取り女の張声に湧いて
いる。また慣いの店に混じり、舶来の山高帽、洋杖、発条仕掛けの鉞力も見えた。それを如
何にも、頑固親父といった形の半纏旦那が、菰を敷き、大和訛で売っているものだから、ま
た面白い。

人出の理由を車夫に訊くと、

「毘沙門さんのお祝いで、寅祭り称います。太子様の前に御出なすったのが、この頃だと
で。」

成程、毘沙門天王は富貴自在と云い、ゑびす神も垂迹と聞く。その御利益は如何程なるや。
猫も杓子も御一新の騒ぎから後、廃仏毀釈の盛り上がり、誰彼、幾らが寺仏を信ずるかも
分からぬ世で、繁盛を見るに、流石、寛大なる仏天の御威光、幾らも陰ることのないらしい。
それにつけても、湯気立つ酒の、太夫にも勝る媚眼秋波よ、寸でのところで、私の、人に笑
わるる程の心信が頼り、先ず詣でるのが道理と、これをぐっと堪えた。いや、良く知る人も
あろうから、やはり正直に言っておく。外で売る酒の、虫が入らぬか気掛りで、一息に気持

ちが冷めてしまった。己が性癖の、不便を嘆くばかりで。

さて、車夫は大鳥居の下に待たせ置いて、かの楠木公の崇めたと謂う、毘沙門天王にお目に掛かる。本堂は、山の臍へそより、中天に迫出す舞台造。京の、清水寺のそれより僅か小さい、雪に白んだ、木々に浮き出る黒薨、朱欄干、垂木に並ぶ、緑青を吹いた吊燈籠、唐破風はの内には、金泥で記した毘沙門天王の五字が、百足を縁にした扁額がくに、朗々、お名乗り遊ばされる、威風の、減じるものでない。堂内を覗くと、唐様装束を召した憤怒の相、毘沙門天王の顕はれる。三昧耶形まじに則い、左手に宝塔、右手に宝棒、足元には悪鬼を踏みしめた、昭然たる御姿よ。凝と結んだ口を一度、喝、と気声を発すれば、忽ちにして、天魔波旬も退ける、その迫力に、息を洩らした。傍らには、奥方である吉祥天が、目を伏して、慎み深く、妙なる笑みで立っておられる。不思議なものよ、あれほど、威敵を放っておられた毘沙門天王が、優し気な顔をお見せなさる。しかし、嗚呼、悲しい哉。物見る人の少なさよ、先に来

ていた客は、視界の端にちらと入れるばかり、掌も合さずで、案内者の説明を、呆と流している。その案内者も、また酷い。提げ持つ鞭の尖が、説明の度、御尊像の、御目、御眉の前を、今にも触れそうに、ひゅんひゅん、忙しく動き回るのだ。三宝守護の毘沙門天王、およそ、瑣事に御立腹でもあるまいが、仮え御寛恕を賜れども、その胸臆、嘸や御鬱陶しかろうと思う。常に増して、御相形の厳しく見ゆるのも、彫りが良いだけではありますまい。

麓でも感じた事だが、昨今の、功利主義だとか、現実主義だとかの向きには、ちよっと、申すべきことがある。実に、欧米列強の優ると言うは抗わぬし、その技術に、私も存分に助けらるる所だ、が、それは古来の、観音鬼神を軽んじると同義でない。先日、大地震があった際、散々に頼んだのを忘れるか。幼き時分、町境で、少し暗くなつた物陰の、何もなし、薄ぼかりが風と揺れるのに、身を震わせて、駆け足で急いだのを覚えぬと見える。常ではなし、せめて神社の中、神仏の前限りのこと、礼を尽くし、首を垂れても良からうに。それでいて未だ、袋守り、破魔矢やは、変わらず売れると聞くから、不思議なもので。持ち主の敬心が喪れても、恐れる側には十分なのか、妖怪変化の嘶も、とんと聞かなくなったから、

いやはや、今や妖あやしの輩の方が、余程信心に篤いらしい。人の心の、かくも遠く離れてしまった。

気付くと、他の客は参詣を終えたと見えて、何時からか誰も居ない。探しても、一向見つからず、はて、そう長い間でもなし、一体何処へ消えたものやら、と少し気にもしたが、先まで不満を募らせた相手、別に行く方が気も安かろう、そう思い直すと、不思議と体は軽くなった。

さて、改めて毘沙門天王に向き直ると、その脇、本堂の端の、小さな経机に向かつて、先ほどまでは居ただろうか、若い僧が一人、襷褌の目立つ、墨染の、褪せた衣を着て座っている。念をと思つて、「御参りを、」声を掛けると、私に気付いていなかったか、一瞬驚いた様子で、如何にも、不思議なものを見るといった顔。

「あの、御参りはどのように。」

再度尋ねると、今度は和やかに応えて下さった。

「どうぞ外陣まで。毘沙門天王の御前で、一念祈願し、——とお唱え下さい。」

流水を思はず、玲瓏、澄んだ声で。御真言は、一度で覚えきらなかったが、何となし、音を拾って、其れらしい言を繰り返すと、優しく微笑みて頷きなさる。彼は「暫し、」と言いついて、経机にあった筆を執り、紙に何やら書き物をする、端を裂いて、私に手渡した。紙には僧侶らしい、質実な筆致で、「御吠室羅縛拏野莎賀」の御真言が、横には、「オン・ベ イシラ・マンダヤ・ソワカ」と読みを添えてある。懇篤、恐れ入る。

「これは、ああ、すみません。ご丁寧に。」

「いいえ。どうぞ、ご緩りお参りなさい。」

然らばと、勇み、階に足を掛けた際、足袋の、指の先が少し、雪で汚れたのに気付いた。極の悪く、躊躇う私に、

「そのままでお宜しい。後で拭きますから。」

事もなげに、するりと言うのである。好意に甘えて、外陣の畳に上がり、辿々しく御真言

の文字を唱えると、音もなく、彼の僧も脇へ並び、一緒になって手を合わせた。その姿が、清廉、澄んだ池に立つ蓮花の如し、寂しく、しかも何となく尊く、正に、彼処におわする、毘沙門天王の御前へ、私を導く、謙讓なる、一個のお取り次ぎの様に見えた。かくてこそ、法師の効かはあろう。私は何時いつしか、この若僧にやくそうに見惚れていた。

「拝見をいたしました。」

「はい。」

「あの、観料は。」

「貰いません。熱心にお参り下さった様で、十分です。」

「それでは、此方が済みません。」

「本当に、お氣遣いなく。と言いましても、断りすぎも失礼でしょうから、では、御守代としてお納め下さい。先ほどの御真言を、この袋に。」

受け取った袋は、失礼を承知で御免、生地は厚いが、少し襤褸の目立つもの、しかしながら、彼から貰ったという事実が、錦糸を織った袋よりも嬉しいもので。

「有り難うございます、きっと、大切にいたします。時に、御坊は他の客のどちらへ行つたか、ご存じで。」

「さて、心得ません。辺りに居ないところを見ますと、御戒壇巡りかとも思いますが。ご案内しましょう。」

彼の僧に連れられ、本堂の奥へ行くと、御戒壇巡りは、先も見えぬ暗闇で、大蛇の口のお大穴が、漆よりもなお、僅かな光にも照らされず、階段の先に、ずっと続いている。

「私は此方で。下は一本道ですが、決して迷わぬよう、右手を壁に添え、足下に気を配ってお巡りください。手が金属に触れましたら、御目出度し、それが宝珠を納めた倉の鍵ですから、今度は御真言も結構、一念、強く御祈願なさい。きっと、成就なさいます。」

「これは随分、真暗闇で。私は、剩り暗い所ですと、失礼、鼠等が恐ろしいのですが、居ないでしょうか。」

「鼠ですか。何せ周囲は山ですから、どうでしょう。や、串戯じょうだんです。寺では鉄鼠の嘶は笑い事では済まずで、経巻を嚙られては困りますから、頻りに見えています。それに、今は寒いで

すから、まず居ますまい。万が一出ましても、唐土ちゆうこしでは、鼠は毘沙門天王の御使い、縁起の宜しいもので。失物が見つかるやもしれません。ただ、

言い難い言葉なのか、最後は、件の、澄んだ声が、氣遣ってだろう、どうも尻すぼみで、寧ろ、不安を掻き立てた。

「ただ何でしょう。」

「いえ、何も。恐らく余計な心配でしょうが、どうか剩り人の世を疎まぬように。もし迷いましたら、人に訊くか、先ほどの御守りを。きっと助けになります故。」

「一本道でしたら、まさか、迷いますまい。」

「ええ、世捨ての戯れ言です。ですが、私はこの言葉を、本当に伝えたかった相手に、伝えられませんでしたから、どうしても。あ、氣分を害されましたら、申し訳ありません。どうぞ、御戒壇へ。」

「いえ、害してなどおりません。注告、痛み入ります。其れでは、御免。」

口ではそう応えたものの、心安からず、心音の少し早くなって、どく、どく、脈を打つの

が分かる。何か不安がある時というのは、目に映る物全てが、鮮明で、かつ荒々しく見えて、殊に、左の隅、誰もが右手を壁に擦るので、其方に近づく人もないのだろう、大きな蜘蛛の巣で、埃を絡めて、白く浮き上がって見えるのが、何とも恐ろしかった。

階下は兪々いよいよ暗く、臉の境も分からず、なにせ、閉じても開いても、全く変わらぬ闇ばかりで。右手の、冷たい壁の感触だけを頼り、一步づつ、遅々に進む。以前友人と、とうに棄てられた、底の深い、苔生す古井戸を覗いたことがある。戯れに投げた小石の、何時までも水音を立てぬのが、急に心細くなって、強がり、笑ってこそいたが、掌たなこころに、嫌な汗が付いたのを覚えていた。以来、自分も小石と同一おんなじで、吸い込まれ、消えてしまうのではと、努めて闇を避けるようにしていた。それが、実際に中に入ると反対で、行く先に道を疑うと、途端に闇が、今度は実体を持って襲いかかる。自分の四辺まわりに、何者かが立って、手を広げている気がしてならないのだ。闇に口を塞がれたと言っても、馬鹿なことを、と人は笑うだろうが、あの息苦しさ、送る足の、川に逆らうような重さは、他に表現を知らない。不安に堪え切

れず、手を、前へ突き、横へ振りもするのだが、空しく虚を搔くばかりで。

長い間暗い場所にいると、他の感覚が鋭くなって、鼻は、古い倉にある、土臭く、埃っぽい、しかし不思議と嫌のない、独特の臭いを感じている。耳は、下駄が立てる、砂利を擦る音の他は、どん、どん、と一定の拍子を打つ、心音だけを聞いていた。彼の信州善光寺では、戒壇巡りを胎内巡りと称うそうで、つまりは、暗闇と、臭いと、心音を以って、母親の胎内をなすのである。無論、記憶にないが、この闇と心音の恐怖に堪える、赤子の強さには驚くばかりで。いや、その不安を感じさせぬ母こそが、寺の胎内巡りでは、御仏と喩える程に、何よりも偉大なのである。

僅かづつ足を進めていると、右手が、硬く、滑^{すべ}らかで、冷たい何かに触れた。後に考えれば、僧の言っていた、秘仏の倉の鍵だろうが、何せ大層怯えていたもので、先に話していたのも助け、鼠の背の様に思え、大声を上げ、慌てて身を振り、尻餅を付いた。声は響かず、闇はすぐに訪れる。見渡しても、依然、辺りは真暗で、何に触れたか確かめようもない。鼠の声でもないかと、耳を澄ますのだけでも、何も聞こえず、早くなった、心音だけが喧^{やかま}しい。

慄然と、一刻も早く日の光を求めて、私にしては珍しいのだが、大雑把に砂を払うだけ、慥かこちらだろうと、一度離して右手を、再び壁に付き、いっそ頭でも打てば良い、足早に歩き出した。

一周、ぐるりと巡ったのだから、外へ出るれば、先程と同じ本堂であろう、そう思っていたが、不思議と、奈辺なへんと知れぬ所に立っていた。彼の僧も、他の客も居ない。代わりに、木々の奥から、「羯諦、羯諦、波羅羯諦、」幼い、可愛らしい声で、般若心経が聞こえて来た。声の方へ少し進むと、急に草木は拓け、足下は均らされ、大きな道に出て、そこから延びる長い石の階を、年の頃が十を越えるか程の、竹箒で雪を掃きながら、縮緬の白手拭いを、びらり帽子に被って、楽しそうに経を読む少女がいる。

「こんにちは。良いかな。」

「はい、こんにちは。良いですよ。」

声を掛けると、矢鱈に張り上げで、私の言葉を繰り返した。元気が好ましい、明るい、人懐こい笑顔。

「誰か、参拝客を見てないかい。」

「見てないかい、いや、分かりません。ずっと掃除をしてましたけど。それよりも、叔父さんは何処から来たんですか。」

背の高い草を幾つか掻き分けたが、獣道の様なものには確かにあった、が、少女に言われて振り返ると、そこには鬱蒼とした森が、とても人の踏み入るのを許さず、広がっているばかり。

「あれ、どうだろう。いや、ちょっと迷っていてね。お寺を探しているんだが、近くになかないかな。」

「ないかな。ありますよ、この階段の先に、命蓮寺が。他は、私は知りません。神社だったら、博霊と守矢が在るけれど。」

いずれの名も、聞き覚えはなかったが、朝護孫子寺の末寺であろう。そうでなくとも、住

職の一人も居ればそれで済む、何にせよ、道さえ知れば良いのだ。

「ありがとう、じゃあ行ってみるよ。お掃除、頑張つて。」

「はい、頑張ります。」

背に可愛い、少女の経を聞きながら、石の階を上り始めた。門前の小僧は習わぬ経を読むと聞くが、彼女の経も、歌か、あるいは一つの口癖と思つているのだろう、妙な節を付けて、同じ所を延々繰り返している。これを信心と言うかは、私には分からない、いや多分言わぬだろうが、聞いていると、気分は悪くないもので。

脇に、休憩用の小屋があった。人も居らず、ただ椅子と屋根ばかりの物だが、渡りに船と
言うべきで、杖と傘が、三本ずつ置いてある。木の札に、「後で御戻し下さい」、と墨で書か
れていた。傘の盗難等は、これも悲しいことに、最近増えた気もするが、杖と同数が残つて
いるのを見るに、確かに、用いた誰かは返してもどいるらしい。感心なこと、然れば、私も必ず
返すからと、一本の傘を借りて、また上り始めた。

傘は、借りておいて文句もないが、濃い茄子色の、骨の多い蛇の目傘で、東京では売れぬ

だろう、などと考えた。そういえば、私の先生は、洋傘が甚いたくお嫌いで、この程度の小雪ならば、冬でも持つ扇を、さっと庇に、それは粹に歩かれたもので。初めは懂れて、弟子の皆で真似などしたけれど、上手くは行かず、扇を頭上で振り回す、何とも野暮な辻踊りおどになった。拘こり続ける者もあったが、私は早々に諦めて、大きな洋傘を買った、が、今日のように、雪の降る寺の道を上がるには、やはり蛇の目の方が絵になろう。下駄は、朴歯のしか持っていないので、雪の階を滑らぬよう、一段、また一段と、踏みしめながらに上がる度、蛇の目が、びよんびよん、上下に揺れて、遠くから見れば、宛ら一本多々良からかさおぼけに御座い、調子に乗って、どんどん上っていく。道の両には石の灯籠が、ずらと並び、昼間なので、勿論火はないが、一つだけ、赤く点いたのがある。よく見ると、灯籠の後ろに、椿が、暖かい日が続いたからか、一輪だけの早咲きで、雪を載せて、寒いだろう、健気に咲いていた。

命蓮寺が近づいた頃からか、石灯籠の裏に、奉納の紫幟が並ぶようになった。所々、色の褪せたり、枝が破いたものもあるが、殆どは綺麗なもので、最近に納めたか、百足の紋に毘沙門天王の文字と、奉納者の名が残っている。朝護孫子寺の末寺と侮る無かれ、この命蓮寺

は、十分な尊敬を集めているらしい。下谷の、五重塔へ行った時に、同じ様な、幟の並ぶのを見たことがあった。個人や、会社の物もあって、何らかの御加護を頂こうと、浅ましい、人の我儘の積み重ねであるのに、この幟が並ぶ光景は、何故か神秘的に見えてならなかった。それは土地の、名を知った寺の威光に当たったことと考えていたが、まだ知らぬ命蓮寺の幟でも、同じように、只ならぬ力の端を感じ入るのだから、人の気とは、如何に不思議なものか。

命蓮寺では、堂の前で声を上げたけれど、誰もいないよう。さても、寺であれば多少は叱られまいと、一人、巡りみる。案外に広いようで、小さな御堂が幾つもあった。その一つ、寺の隅の、陰になった処に、摩耶堂があって、須弥壇には、今にも声の聞こえそうな、柔和に微笑む摩耶夫人が、腰を少し折って、優雅にお立ちなさる。天竺はやはり暑いのか、紗羅を大きく開いて、豊かな乳房を、惜しみなく見せながら、藍毘尼るんびにの庭で、孔雀の尾羽で陰を作り、侍女と戯れなさるお姿に、自分も寒さを忘れ、母に誘われて、浄土に踏み入るような心地で、思はず、そっと手を伸ばした。

「あれ、可笑しいな。人間のレア度は零なんだけど。仏像泥棒なら、諦めなよ。」

背後から声を掛けられ、振り返れば、掃除をしていた子よりも更に幼い、十を数える程の、背の低い少女である。しかし、何よりも目を引くのは、頭上に見える、二つの大きな、鼠のような耳、また細長い尾が、体の後ろで鉤を作って、籠を下げ、中から鼠が覗いていた。

「君は、その耳や、それに尻尾は。」

「あれ私を知らないのかい。ああ、臭いが違う、さては外の世界から来た人間か、成る程、確かに少しはレアだけれど。私はね、いや、名は別にいい。妖怪だよ。君は運がないね、聖や、少なくとも私以外の誰かに見つければ、無事に戻れたのに。」

自らを妖怪と言う少女は、事もなげに、恐ろしいことを告げた。慌てて、逃げようとするが、少女が持った二本の長い棒に、容易く退けられる。それは、とても人とは思えぬ、圧倒的な力で。

「頼む、助けて。助けてくれ。」

「私は別に、君に興味はないんだけど。この子達はそうでもないみたいだ。なんせ春先はお

腹が空くからね。里の人間を襲っては駄目だと言われているけど、君は例外。骨も残さなければ、誰に知られる事もなし。つまりこの子達には、君は急に降って湧いたご馳走なんだ。」

言いながら、私の抵抗を軽く、片手間で遇いつつ、鼠の、肩に上った一匹を、愛しそうに撫でている。其れを見ると、急に頭が冷えて、だからといって解決策など見つからず、代わりには彼女の言葉の、小さな違和感に気付いた。彼女は確かに、この子達と言っていた。嫌な予感に、背後を振り返ると、今まで参拝していた堂の奥、摩耶夫人像や、侍女の天女の、衣服や、腕の陰になった場所から、無数の、小さな赤い目が、幾組も光っている。恐怖に足が竦み、立ち続ける力もなく、無惨に座り込んだ。そのとき、胸元から、あの若僧に貰った御守りが、するりと滑り落ちて、襦袢の袋の口から、御真言を書いた紙が覗いている。私とっさに其れを握りしめると、目を閉じ、覚えたばかりの御真言を夢中で唱えたのだ。

「オン・ベイシロ・マンダヤ・ソワカ。オン・ベイシロ・マンダヤ——」

何時に迫り来ると怯えた鼠は、しかし一向、噛まれる気配はない。恐る恐る目を開けると、先ほどの妖怪の少女が、少し呆れた顔で立っていた。

「何だ、毘沙門天様の信徒か。じゃあ私が襲うわけにも行かないな。いや、先ほどは運がな
い等と言って悪かった。君は実に運が良い。私じゃなければ、その真言じゃあ、食われてい
たよ。毘沙門天様の御真言は、本当は、オン・ベイシラ・マンダヤ・ソワカだ。正しく唱え
なければ、なかなか助けてもあげられない。」

何が起きたのやら、呆ける私を、少女は苦笑いしながら見つめ、身を起こすのを手伝った。
年頃の少女の、白く、小さな手であった。

「いいや、気にしなくていい。とにかく、君は助かった。聖を呼んであげるから、ここで待
っている。あ、今のことは秘密にしてくれよ。じゃないと怒られてしまうから。私は外の世
界には行けないが、眷属はそうでもない。お互い、無駄に争わぬ方が幸せだろう。」

一方的に約束を取り付けると、無論、私に破る気などないのだが、妖怪の少女は、手に持
った二本の棒を交わらせ、何か呟いた後、去っていった。

少し待つと、一人の尼公が顕れた。彼女が、先ほどの妖怪の言っていた聖なのだろう。と言っても、頭は丸めず、長く延ばした髪は、異国の人も見うる、波打ち、先は少し色の抜けて、金糸の様に輝いている。髪のみならず、服装もまた破戒を重ね、袈裟こそ掛けてはいるが、その服は僧衣でなく、黒墨で幾度も重ねて染めた、裾の広がる洋服ドレスで、鹿鳴館で踊る方が、余程相応しかろう。傍目には、如何にも真つ当な尼公には見えねども、しかし、手を合せて、深く腰を折る所作の美しさ、身に纏う清浄な氣とが、嗚呼、先程の摩耶夫人像とも重なって、確かに彼女が尼公であると示している。

「お待ちせしました。この命蓮寺で住職を勤めます、白蓮と申します。ナズーリンから話を伺いまして、外の世界からの迷人まればとだと。」

「外の世界というのが、その、」

「説明するのは難しいですが、ここは、貴方が暮らしていた場所と、とても近くて、まるで異なる場所なのです。私が、責任を持って元の世界にお戻ししますので、ご心配なく。」

「何やら分かりませんが、帰り道をご存じなら。あの、それで先ほどの、鼠の少女は何だっ

たのでしよう。」

「なにか、ナズーリンにされましたでしょうか。」

「何も。断じて、何もありませんが、ただ自らを妖怪と称していたもので、耳や尾を見せられては、信じぬ訳にもいかず。」

一方的とはいえ、一度あの恐怖に晒されては、とても約束を違える気は起きなかつた。ただ、私は生来あまり嘘が上手でないのも、もしかしたら、尼公には気づかれたような気もある。私の証言が如何に不自然でも、尼公は完爾にっごりと微笑んで、頷いて下さる。幼い頃に無くした、幽かな記憶が浮かび、何となく、跋が悪く、目を逸らした。

「確かに、ナズーリンは鼠の妖怪です。ですが、怯えないで下さい。この寺には他にも、妖怪の弟子が居りますが、皆修行に励み、人を襲わないと誓った子ばかりですので。」

「他には、いったいどんな妖怪がいますか。」

「そうですね、船幽霊や見越し入道、唐傘小僧、山彦に、あとは外の世界でも有名な妖怪ですと、鵜でしたりとかが。」

私も知る、名だたる妖怪鬼神の数々で。先ほどの鼠少女、名をナズーリンと言うらしいが、彼女はこの尼公の言うところ、人を襲わぬ誓いを立てたとのこと、然れば、他の妖怪の誓いも疑わしいもの、次にどのような恐怖に遭うか、肝の冷える思い、頼みは、摩耶夫人とも見える尼公のみで、その時、ふと疑問が湧いた。

「その、尼公は。いや、あの、何でしょう。失礼ですが、尼公も何かの妖怪で。」

「いいえ私は人間ですよ。御仏の加護で、ほんの少し長く生きておりますが、確かに貴方と同じ、人間です。」

「では妖怪といて、怖くはないのですか。」

「はい、ちっとも。勿論、人を食うと聞けば、恐ろしいと思います。人を騙すと聞けば、悪いと思います。ですが、ただ妖怪だからと言って怖いとは思いません。多くの妖怪は、そんなに人間と違います。聞けば、妖怪にも不安や、苦しみや、悩みがあるらしいのです。でしたら、私は彼女たちも救いたいと思ったのです。彼女たちも、御仏を信じ、熱心に修行するのなら、必ず悟りの境地に行き着けるでしょう。」

彼女の言葉は、包み込むように優しく、暖かで、自然、深く頷いた。

「私も、そう考える機会がありましたもので、大変に御立派かと。」

「自分で言うのも何ですが、共感頂くことの、多くはない考えですので、意外です。お話を伺っても。」

「あ、いえ、自分は尼公のように、深い考えや、信心あつての事ではないのですが。その、世に神仏の尊ぶ人が、あ、私の居た、外の世界での話ですが、大変に少なくなっております。お経を恐れて逃げていく妖怪の方が、余程に信心の篤いのではないかと。」

「そうですね。人々の心が御仏から離れるのは、確かに寂しいことですが、御仏はとても寛大です。信ずる方は日々、信じない方は気付いたときにも、修行に励んでいただければ十分。御仏の冥加は尽きません。私のような、少し道を外れた者でさえ、見守って下さるのです。ですから、あまり嘆かなくても宜しいかと。それよりも、私には、寧ろ貴方が少し心配です。」

「心配、と言いますと。」

「人の世に生きながら、人の世を疎むのは剩りに辛すぎる、と言うことです。私も、そして先達の僧侶達も、そうして世を捨てた人は多いですが、貴方は、やはり人の中でこそ、生きべきと思いますので。ですから、余計なお世話かも知れませんが、剩り人の世を疎まぬように、と。」

「同じ事を、つい先ほど下の寺でも言われました。剩り人の世を疎まぬように、そうですね、一度、考えてみます。」

「下の寺、と言いますと。幻想郷には命蓮寺の他に寺はありませんから、外の世界のでしょうか。」

「はい、朝護孫子寺の、名を聞きませんでした、蓮の花を思わせる、気品ある若僧でした。どうやら、私の他に伝えたい相手がいらしたようですが、尼公にも言われたのでは、人事ではありますまい。そう、この御守りを下さったのが、其の方で。」

私の持つ御守りを、一目見るや、尼公の笑みが驚きに消え、一瞬で消え、「御貸していただいても、」震える声で尋ねた。「どうぞ。」手渡すと、何度も、指先でなぞり、布の感触を試し

ていたのだが、漸く得心がいつて、私に戻した時には、尼公は再び笑顔であったが、眦の端に、涙も滲んでいたようで。

「どうされました。」

「有り難うございます。この守袋に用いた端切れに、心当たりがありました。そうですか、彼は、人の世を疎まぬようにと、そう言ったのですね。それがなんだか、はい、私事のように、嬉しくて。」

尼公は、袖で涙を拭うと、困惑する私を連れ、寺の裏の、一つの墓の前へ案内した。綺麗に磨かれた、小さな御影石に、花が備えてあって、線香の消えたのが、幾つも残っているのを見ると、頻繁に通っているらしい。

「出会ったばかりで、頼みごととも恐縮ですが、一緒に、御参り下さいますか。」

「それは宜しいですが、これは誰の。」

「私の、いえ、ある高名な僧のものです。彼は、とても徳の高い僧でして、生前は、幾つかの奇跡を起こしました。死後、少しでもその力に肖ろうと、彼の衣服の端切れは、人々の手

で細かに分けられ、御守りに使われまして。貴方の持つそれも、その一端なのです。今日貴方と出会えたのも、その御守りの奇跡と言えるでしょう。」

「そんな謂われが。でも、触っただけで、よくお分かりになりましたね。」

「分かりますとも。その柄がらは、ええ、見る人が見れば、直ぐ分かるものでして。では、今日の奇縁を彼に感謝しつつ、御参り下さい。目を閉じて、言葉は結構です。次に目を覚ました時には、元の世界に戻っておりませうから。」

並び顔を伏せると、手を合わせた。目を閉じる前に、物惜しさに駆られ、隣を盗み見れば、尼公の、美しい横顔には、涙が一条、伝ひとすじっていた。それは典麗、蓮の花を思わす美しさで、清らかな優しさと、溢れんばかりの、嗚呼、私はとうに忘れた、母のような慈愛を湛えていた。その顔を見て、心安らかに、私は、静かに目を閉じた。

暫くして目を開けると、墓は、磨かれた御影石から、石で組まれた祠に代わっていた。側

の碑には、「命蓮上人之塚」と刻まれている。尼公は、何処にも居なかつた。代わりに、本堂で見た案内者と、客の幾人かが、並び手を合わせている。

「あれ、お着物の旦那。途中で見かけなくなつたと思ひやしたが、何時合流されたんで。」

「私かい、本堂の後に、上の寺を見て、直ぐにこの墓の前に来たけれどね。」

「はて、上へは私たちも行きましたけど、居りましたかね。飛鉢堂は小さな御堂ですし、そこまでは長く一本道、擦れ違えば分かるとも思いますが。何かあつたんですかい」

「いいや、何にも。」

不思議がる案内者や他の客を、適当な作り笑い、愛想よく誤魔化した。自分でさえ、つい先ほど迄の出来事が何であつたのか、俄には信じがたいのだ、話したところで、気を違えた、と、医者と呼ばれるのが落ちである。

「所で、雪も強くなりましたし、これから、麓の店で、地元酒でもと、話してたんなんです。ご一緒に如何です。」

参拝客の一人が、私に誘いかけた。先ほどまで毛嫌いしていたのに、今は、其れほど嫌な

気はしなかった。

「では、ご一緒しましょう。来る途中の、酒の臭いには、私も袖を引かれたもので。」

連れだって、麓の店で、熱い湯豆腐を肴に、酒を楽しんだ。良い気分で、つい飲み過ぎてしまつて、帰りの停車場ステーションに蛇の目を忘れたけれど、彼の僧に貰った御守りは、今も仏壇の、先生の写真の脇に置いてある。其れを見るたび、信貴の、二人の僧侶を思い出すのだ。不満は未だ多けれど、お陰様、人の世の、疎ましいとは思わぬもので。

近藤貴弥
母

風雨を受け、桜は寒空の下で舞う。その身を翻し、揺れ、ふっと回り、藤原妹紅の肩を撫でたかと思えば、そのまま地に落ち、踏まれた。桜は千切れ、粉々となって、烈しい雨に打たれ続ける。

人里は重苦しい空模様をそのまま写し取ったかのように、皆一様に沈黙を貫き、涙を流している。何かあったのか、と尋ねるも涙に濡れた声が返ってくるばかりで、何も分からなかった。

人里で最も大きな屋敷の空気は、人里比べると一層に重たい。屋敷の主人は何かの対応の最中で、客座敷に通された。下女に何かあったのか、と尋ねると表情を曇らせ、私は何も……と答えてくれた。主人の対応というのは十中八九、この重たい空気を作り出している原因の解明であろう。

主人は年端の行かない少女だった。本来ならば父や母と共に農作物を育てるのを手伝うような歳である。そんな少女が何故、人里で最も大きな屋敷で暮らしているのかというと、そういう血筋ということである。が、主人という部分は引っ掛かる。主人を名乗るには、少女

はあまりに幼かった。

本来ならば主人を務めるであろう、少女の父らしい人物も母らしい人物も見たことがない。少女の口からも聞いたことがない。下女に訊くも、私は何も……と答えるばかりだった。少女は本来ならば、屋敷の主人になるはずではなかったのだろう。父や母を早くに亡くし、少女が屋敷の主人にならざるを得なくなった。

雨はいよいよ本降りを迎えたのか、烈しさを増す。妹紅の待つ座敷に主人の姿は未だ見えない。耳を澄ませてみるが、座敷から遠い所で話しているのか、声一つ聞こえてこない。折々で下女が申しわけなさそうな顔をして、今しばらく、と言いに来る。妹紅は沢山の時間と暇を持て余しており、雨宿りには丁度良いわ、とだけ返した。妹紅は雨音に耳を傾け、待った。

妹紅が客間に足を運べるようになったのは、雨が上がった頃だった。しかし空は依然として暗く、もう一雨来ても全然おかしくなかった。

少女は長い応対に疲れを吐き出すように、ふっ、と一息吐いた。この前見た時よりも頬が

瘦せ、青い影が顔中に漂っているのが見える。

「何かありましたか？」

「こちらでは何も」

「こちらでは？」

訝しむように目を向けると、少女は里の外の出来事を話してくれた。

少女達の暮らす里の外は、物の怪や妖怪の類が跋扈している。どうしてそのような類が蔓延っているのか妹紅は詳しく知らない。そういう世間や俗世のこととは無関係でいたかったからである。

里の外にある広大な竹林に庵を結び、起居している。里に足を運んで、こうして屋敷にまで訪れるようになったのは、庵の隙間から漏れる雨を凌ぐ程度でしかなかった。妹紅がこの屋敷を見付けた頃、屋敷の瓦が崩れ、柱は曲がり、烏や鼠の住処となった廃屋だった。

そのような廃屋が屋敷と呼ばれるようになったのは、この少女が来てからだ。言葉の分かる妖怪達——少女は彼女等のことを賢者と呼んでいた——と話し合い、住居区としてこの廃

屋が宛がわれ、屋敷に改築され、人里と呼ばれるまで発展したのである。

人間が妖怪に襲われることは、決して、珍しいことではなかった。妹紅も度々目撃している。が、こうも里全体に居たたまれない空気が流れているのは妹紅も初めてだった。

「子供が」

少女はそれ以上の詮索を拒むかのように言葉を切る。先客の用件も、少女の疲れ切った表情も、その一言で十分に理解できた。しかし当然の疑問が、妹紅の胸に浮かぶ。里の人間は外に出られない。子供となれば、親は勿論、両隣の家のも自然と協力し目を光らせている。月が出てくると、里の明かりは全て消され、門を閉ざし、身を守るかのように闇の中へ消える。

そんな環境で、ある子の姿が見えなくなった。妖怪の仕業である、と考えるのが自然だった。しかし、少女と賢者達の間で一つの約束が成されたのではなかったか。妖怪の人里侵入を禁ずる、という約束が。賢者達は、その約束に了承している。他の妖怪達も分かっていたのではないだろうか。しかし、その約束事には、反故された時の罰則がなかった。少女にそ

これまでの能力なかったのか、賢者達が煙に巻いたのか分からない。

この一件、約束事を破った妖怪に責任があることは確かだが、果たして、その妖怪のみの責任なのだろうか。罰則まで決められなかった少女にも非があるのではないか。妖怪が人間を襲うということを理解した上で罰則について言及しなかった賢者達の責任や管理体制についても言及されるのではないか。そのような問題は、少女と賢者達の間でのみ取り交わされることだろう。

少女は積み重なる物事を数えるように指を折り、こういう言葉を吐いた。

「約束、できませんでした」

「何の？」

「同じようなことが起きないと言えなかったんです」

少女を初めとした人間達は、妖怪に対抗する術を持たない。妖怪に襲われないように願う、日々を生きるしかなかった。子が帰ってこない先客が、どういう言葉を少女に浴びせ、叫び、縋り、涙したのか想像に難くない。

「何の仕業か分かりません。ですが、この一件を放っておくと、必ず同じことが起きます。誰も何もしない。これほど絶好な場はありません。身を守るために、私達も一つ、考えなければならぬようです」

そう宣言する少女の手は震えていた。少女は里の中の誰よりも特別だった。この屋敷を賢者達から宛がわれのにも拘わらず、誰も何も言わなかったのは、少女の功績といえる。妖怪の賢者と話をし、書を認め、読むことすらできた。

少女は称賛や感謝の言葉を受けると、私一人では何もできませんでした、と返すだけだった。その言葉通り、農作物を育てるのを、服を織るのも、庵を組むのも得意ではなかった。そういう教えを受けていなかったことを示すかのよう。

妹紅もここに来た頃は少女と同じようにできないことが沢山あった。少女のように和を成すのも得意ではなく、一人の時間ばかりあった。一つ一つを覚え、里の外で生活している。

ここに来るまで、妹紅と少女はどこかで会っているのかもしれない。妹紅は少女の名前も歳も知らない。廃屋が屋敷に姿を変えようとしている頃、雨が止むのを待っている時に出会

った。先客が居られるとは、と大きな目を丸くする少女に、妹紅は何も答えなかった。少女も妹紅も名乗らなかつた。雨止みを待っているのだろう、と思つたからである。

しかしある時分の、必ずまとまった雨が降る頃になると、妹紅は屋敷の小さな部屋に身を寄せた。少女は、雨ですからね、と妹紅の身を案じ、追いつくような真似はしない。その雨の中、少女と妹紅は話すようになった。少女は沢山のことを知っていた。遠い所の話から近所の食事のことまで。色々なことを妹紅に話す。妹紅がその話の中で最も驚いたのは、少女が一つも同じ話をしなかつたことである。この話はこの前にしてしまひましてね、と恥ずかしそうに笑い断ち断ち切る。覚えているのと尋ねると、忘れられないだけです、と誤魔化すように笑う。妹紅はその笑顔に親近感を懐いた。妹紅自身もしたことがある顔。

「あなたは、母のことを覚えていますか？」

そんな少女の問い掛けに、妹紅は現実に戻ってきた。低い調子だっただけではなく、妹紅に寄り添うように優しいものだった。突然のことに、妹紅の心は跳ね上がったが、平静を努めて問い返す。

「私の？ あなたなの？」

「私は母のことを覚えていません。父のことです。思い出そうとしても全然思い出せないのです。ですからでしょうか、先程まで話していたあの二人の気持ちがよく分からないのです」

少女の調子是不気味なまでに穏やかだった。少女は分かろうと努めている。子供を失った父と母の気持ちを。少女はまだ子供であり、血を分けた者はいない。ならば、父や母について考えてみれば考えられるのではないか、と思ったのだろう。しかし、何も分からない。

少女は里の人間達を守る立場に立っている。これ以上、被害を出さないようにすることは考えられるが、それは父や母の気持ちではなかった。

問われた妹紅は答えに窮した。妹紅も少女と同じように、母でも妻でもない。少女は黙っている妹紅に気付くと、すぐに曖昧に笑った。

「済みません、私ったら」

妹紅は長い時間の中で色々な者と何度も出会い、別れ、最後は決まって孤独を味わう。父

や母のことは、もう沢山の死の中に埋もれ、全くはつきりと思いつけない。思いつけるのは、一人の黒髪の子だけである。あの女がいなければ、妹紅はきっと、こんな暮らしを送ることはなかったはずだった。

父や母のことは思いつせず、一人の女の嘲笑ばかり思いつ出す。少女へ向けられた言葉は自然と低い調子になり、十分な怒気を含んでいた。

「私も、思いつせないわ。思いつそうとしたら、別のことばかり」

もしここに、あの女が居るならば、迷うことなく息の根を止める。女の姿はどこにも見当たらないが、焦ることもなければ、慌てることもなかった。妹紅には時間があった。何度、日が昇るのを見て、何度、月の満ち欠けを数えただろうか。

「私は別のことも思いつせん」

少女の顔には、強い動揺が広がっていた。けれどもすぐに妹紅を気遣うように微笑もうと寂しい微笑を頬に浮かべる。

妹紅は今更になって、そのことを誰かに話したことがあるのか、と尋ねられなかったこと

を悔やみ、恥じた。

妹紅は自らが他の人間と違うことを自覚している。藤原という部分だけではなく、ここを訪れるようになってからも。

少女はどうだろうか。少女は少女自身のことを、どれほど知っているのだろうか。

「生まれは？」

「ここではない、遠いどこかのような……」

「いくつになったの？」

「十と少しでしょうか……」

少女の言葉には常に迷いや不安が帯びている。

胸の内に広がった動揺が少女の瞳にも満ち、大きく潤む。

自分自身のことを知らない少女に、妹紅は最後の手掛かりを投げる。

「あなたは、誰なの？」

「稗田です」

稗田と名乗った少女に、妹紅は怪訝な視線を送る。妹紅はここではないどこかで、その名を聞いたことがあった。名ある書の編纂に携わった人間。あの人間がどういう生を授かり、どのように生きたのかなど誰も知らない。子がいたかどうかということなども。

じつと少女を見るが、嘘をついているようには見えない。少女は首を傾げ、

「何かありましたか？」

と訊いた後、こう訊き返した。

「あなたの名は？」

「妹紅よ」

藤原を名乗らなかつたのは、少女が稗田と名乗つたからである。妹紅が稗田を知っているように、稗田も藤原を知っている。藤原と稗田はそれほどまでに知れ渡っていた。

少女が稗田かどうかのは確証はないが、少女の立場も、その記憶力も、筋が通る。しかし、ならば何故、父や母のことを思い出せないのかとという疑問は残る。少女自身も先ほど辿り着いた疑問なのだろうか。里で暮らす人間達と変わらないのにも拘わらず、何が違うという

のだろうか。

妹紅も里で暮らす人間達と変わらないが、妹紅の場合は自らの意思でこのような一生を送るようになった。

少女の口振りに、少女の意思は感じ取れない。少女とは全く関係のないところで、何かが無意味だと考えるのが妥当だろう。妖怪が、少女に何かしたのであるか。妹紅も少女も確かめる術を持っていなかった。

「妹紅さんは、自分が見たことも聞いたこともないものを思い出すことはありますか？」

妹紅を見る少女の目は、何かを確かめるような不安な色を示している。何かを妹紅に乞うような色だった。

少女は妹紅の答えを導くようにこう続ける。

「私の記憶ではないのに、私の記憶の中にいるんです。雨の中、一つの小さな傘の中で。今方知ったはずの名前を、そう答えると分かっていた私がいるんです」

少女の瞳に当惑の色が帯びる。妹紅はいずれ問われるであろうことに見合う言葉を探す。

誰よりも長く生き続ける妹紅の時間感覚は、人間の時間感覚と同じではない。少女のように、年齢を重ねることもない。身の丈が伸びることもなければ曲がることもなく、手指が細く痩せることもない。少女が妹紅について不思議に思うのは当然だった。

けれども、少女の言うことは妹紅にも分からない。妹紅と出会うよりも前に、少女が妹紅と出会っているなど有り得るのだろうか。妹紅が少女と寸分違う者を見て、少女と出会っていたと思ってしまうのならば思い違いで済む話だった。少女から言われてしまうと、妹紅は何も言えない。妹紅自身のことについては、正直に話せるだろう。少女のことについては、妹紅は何も話せない。そして、少女が記憶の内で探し求める母の姿についても、何も話せなかった。

妹紅は己の無知を恥じ、赤い顔で少女の言葉を待った。少女の震えた唇が動き、こう問う。「私は一体、誰なのでしょうか？」

雨音だけが、落ちてくる。普段の妹紅ならば、何気ない調子で少女を安心させるように、あなたはあなたよ、と答えただろう。今、そんな言葉をかけてしまえば、少女を傷付けてし

まうだけだった。

少女を知ってしまったがため、かけるべき言葉を失ってしまった。少女は少女である、と妹紅が認めたところで、少女自身が分かるだろうか。母のことも思い出せず、自らの記憶の内に誰かの記憶がある、という状況に陥った少女を。

少女の疑問に答えるのは、きつと妹紅ではない。もっと別の男が適任だろう。そのような男が現れればの話であるが。そして、少女がその男に心を許せば、というところであるが。

少女は小さな声で謝った。妹紅は小さな声で、構わないわ、と応じた。

「雨、やみましたね」

と、少女に言われたが、妹紅の腰はいつの間にか重くなっていた。このまま去ってしまえば、少女は少女でなくなってしまうような予感があった。

「少し、昔の話をするわ」

妹紅はそう切り出して、随分と昔の話をする。一人の貴族がいたこと、求婚を考えていたこと、その貴族の娘のこと、俗世から離れて暮らすようになったこと……。そういう自分自

身の昔の話を、一つ、また一つと思ひ出しながら語る。そうして、いつの間にか、竹林で庵を結び、暮らしていることも話した。

妹紅の昔話を聞き、少女の瞳に段々と明るいものが戻ってくる。けれども、その瞳に奥底には、まだ疑念や不安が色濃く残っていた。妹紅は、そういう瞳を、ここに来てから見たことがあった。

ある春の頃である。妹紅は一時の雨を凌ぐため、崩れ落ちた屋根の下で身体を小さく丸めていた。手足を伸ばすと、雨雲に晒され、冷たい。暖を取ろうとしたが木々がいづれも濡れ、火を点けられなかった。

そんな時、一人の男と出会った。従者に傘を持たせるその男は、妹紅を見掛けると膝を折り、何故ここに？ と訊く。その瞳は疑り深いものだったが、不思議と温かさで溢れていた。雨だからと答えると、男は従者の手から傘を奪い、妹紅に差し掛け、この家を直そうと考えている、そうすれば風雨を凌ぐには丁度良いだろう、と語り始めた。妹紅は男の言葉など、全く耳を傾けなかった。男は妹紅が聞いていないことを知っているのか、好き勝手に語る。

随分と騒がしい雨だった。

別れ際、男に名を訊かれ、妹紅と名乗った。男は名乗らず、また会おうと言って従者と共に去った。以来、男とは会っていない。

屋敷が直っても、男は姿を見せなかった。従者も現れなかった。ただ、屋敷だけが残り、集落が出来、里が作られ、少女が主人となっていた。そうなるのが自然であるかのよう。

男が少女の父親であれば、少女は子の気持ちになれたであろう。あるいは、子を亡くした父や母の気持ちに、家族を失った者の気持ちに寄り添えたかもしれない。しかし、少女は何者にもなれない。

男と少女を繋ぐのは、あの瞳と妹紅だけのように思えた。その時、妹紅の胸に全く無根拠な、ある可能性が浮かんだ。男の魂が各地をさ迷い、生まれ変わり、少女として再びこの世に生を授かったのではないか、というものである。妹紅や妖怪という類が存在しているのなら、そのような生まれ変わりが起きていると考えても不思議ではなかった。ならば果たして、何のために男は生まれ変わったのだろうか。そして、全く無自覚な少女の生は……。

その可能性を確かめる術は、妹紅も少女も持っていない。けれどもそう考えるのが、今は妥当のような気がした。

生まれ変わりを信じるのは、妹紅一人で良かった。少女にそのような言葉を投げかけるのは、あまりに残酷なことだった。そのことを伝えてしまえば、少女は少女としての全てを失ってしまう。自身の記憶のどれほどが自分自身のものなのか、自らを悩ませていた父や母のこと、その全てが男にまとめられる。顔も名前も知らない、ただ、魂だけが繋がっている男。そんな男に、少女の一生を任せられるほど、妹紅は軽薄ではなかった。この問題に踏み込めるほど、妹紅は少女のことも男のことも知らな過ぎた。妹紅は静かに腰を上げ、また、と言って屋敷を去った。戸の向こうで、少女の、またお待ちしております、という言葉が聞こえた。

少女は自らを稗田と名乗った。ならば、男も稗田なのであろうか。稗田であるがゆえに、少女の生は縛られてしまうのだろうか。丁度、妹紅が藤原であるように。

少女が本当に男の生まれ変わりであるのなら、少女もまた生まれ変わるのだろうか。も

生まれ変わるとしたら、また同じような悩みや不安を持つ者が現れる。

妹紅が彼女達にできることは、一体何なのであろうか。妹紅には、沢山の時間があった。竹林で庵を結び、そんなことを考えるようになった。

雨はまだ、降り続けている。

それから少し経って、少女が熱心に書を認めている姿を、妹紅は何度も見かけた。曰く、里の間を守れるように書を作っている、と。妖怪から身を守るためにも、と少女は寂しく笑った。妹紅はその寂しく笑う顔にも、ある男の影を感じざるを得なかった。

後書き

この度は、泉鏡花没後八十年記念「東方幻想文学合同『追慕』」をお手にとっていただき、ありがとうございます。

数多ある幻想文学をモチーフにするのか、泉鏡花の幻想文学作品をモチーフにするのか、泉鏡花の他の作品をモチーフにするのかどうか、というところは書き手の皆様に一任いたしました。これまで主催してきた合同誌と一味違ったコンセプトでしたが、寄稿ありがとうございます。

表紙絵を描いてくださった駒碧氏にも、この場でお礼申し上げます。

書き手の皆様がモチーフにされたのは、左記の通りです。

こうず氏

フェリペ・アルファウ『アイデンティティ』（青木純子訳、創元ライブラリ刊『ロコス亭 奇人たちの場景』所収）

収)
フリオ・コルタサル『夜、あおむけにされて』（木村榮一訳、岩波文庫『遊戯の終わり』所

ガルゾ氏 日野啓三『ヴェーアーズ・ハイ』・『夢の島』

ひととせ氏 ますむらひろしの諸作品

榎本太郎氏 小泉八雲『雪女』

藍もどき氏 泉鏡花『十六夜』

深紅香奈氏 泉鏡花『七宝の柱』

近藤貴弥 泉鏡花『外科室』及び幾つかの観念小説

いづみきょうかぼつごはちじゅうねんきねん
泉鏡花没後八十年記念
とうほうげんそうぶんがくごうどう ついぼ
「東方幻想文学合同『追慕』」

2019年（令和元年）5月5日 初版

原作 東方Project(上海アリス幻楽団)

印刷 緑陽社

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ
近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先 stkk7.920521@gmail.com

表紙絵 駒碧（わたり雪）

ロゴデザイン 工藤雅弘

執筆者

こうず

ガルゾ（よろづの葉）

ひととせ（四季堂本舗）

榎粕太郎（青猫幻想団）

藍もどき（東方天翔記CPUダービー処）

深紅香奈（書棚裏の御稻荷様）

本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。
